

開目抄

それ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主・師・親これなり。また習学すべき物三つあり。いわゆる儒・外・内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王、これらを天尊と号す。諸臣の頭身、万民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず。人みな禽獸に同ず。五帝已後は父母をわきまえて孝をいたす。いわゆる重華はかたくなはしき父をうやまい、沛公は帝となつて大公を拜す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形をきざめり。これらは孝の手本なり。比干は殷の世のほろぶべきを見て、しめて帝をいさめ、頭をはねらる。公胤といぬし者は懿公の肝をとて、わが腹をさき、肝を入れて死しぬ。これらは忠の手本なり。尹伊は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。これらを四聖とがう(号)す。天尊頭をかたづけ、万民掌をあわす。

これらの聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。その所詮は三玄をいはず。三玄

とは、一には有うの玄、周公等らこれを立つ。二には無むの玄、老子等。三には亦有やく亦無む等、莊子が玄これなり。玄とは黒こくなり。父母未生ふほみじょういぜん已前をたづぬれば、或は元氣なより生り、或は貴賤きせん、苦樂くらく、是非ぜひ、得失等とくしつはみな自然等じねんとううんぬん云云。かくのごとく巧たくみに立つといえども、いまだ過去未来を一分いちぶんもしらず。玄とは、黒こくなり、幽ゆうなり。かるがゆへに玄という。ただ現在ばかりしれるにいたり。現在にをひて仁義じんぎを製せいして身をまほり、国を安やすんず。これに相違さういすれば族をほろぼし家を亡ほろぼす等いう。これらの賢聖けんせいの人々は聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫ほんぶの背をみず、未来をかが(鑑)みざること盲人ぼんがんの前をみざるがごとし。ただ現在に家を治め、孝をいたし、堅く五常ごじやうを行なずれば傍輩ぼうばいもうやまい、名も国にきこえ、賢王もこれを召めして、或は臣となし、或は師とたのみ、或は位くらをゆずり、天も来きたりて守りつかう。いわゆる周の武王には五老きたりつかえ、後漢の光武には二十八宿にじゅうはつしゆく来て二十八将となりしこれなり。

しかりといえども、過去・未来をしらざれば父母・主君・師匠しせの後世ごせをもたすせず、不知ふち

恩おんの者なり。まことの賢聖にあらず。孔子がこの土に賢聖なし、西方さいほうに仏ぶつという者あり、
 これ聖人なりといひて、外典げてんを仏法の初門となせしこれなり。礼楽れいらく等を教えて、内典ないてんわらば戒定慧かいじやうゑをしりやすからせんがため、王臣を教えて尊卑をさだめ、父母を教えて孝の高きことをしらしめ、師匠を教えて帰依きゑをしらしむ。妙樂大師みょうらくだいし云く「仏教の流化るけじつ実じつに茲こゝに頼る。礼楽れいらく前に駈はせて真道しんたう後に啓ひらく」等云云。天台てんたい云く「金光明經こんこうみょうきやうに云く、一切世間の所有の善、皆この經に因よる。若し深く世法せほつを識しれば即ちこれ仏法なり」等云云。止觀しかんに云く「我れ三聖を遣つかわして、彼の真丹しんたんを化けす」等云云。弘決くけつに云く「清淨法行經じやうじやうほふぎやうぎやうに云く、月光菩薩がくつこうぼさつ彼に顔回がんかいと稱し、光淨菩薩こうじやうぼさつ彼に仲尼ちゆうじと稱し、迦葉菩薩かしょうぼさつ彼に老子と稱す。天竺てんじくこの震旦しんたんを指して彼かと為しす」等云云。
 二には月氏がつしの外道げだう。三目八臂さんもくはつびの摩醯首羅天まけいしゆらてん・毗紐天びちゆうてん、この二天にてんをば一切衆生の慈父ひも悲母ひも、また天尊主君と号す。迦毗羅かびら・漚樓僧伽うるそうぎや・勒娑婆ろくしやば、この三人をば三仙となづく。これらは仏前八百年已前已後の仙人なり。この三仙の所説しゆいを四章陀しじやうだと号す。六万蔵あり。乃至ないし仏出世ぶつしゆつせ

に當つて、六師外道この外経を習伝して五天竺の王の師となる。支流九十五六等にもなれり。
 一一に流流多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心の堅きこと金石
 にも超えたり。その見の深きこと、巧なるさま、儒家にはにるべくもなし。或は過去二生
 ・三生・乃至七生・八万劫を照見し、また兼て未来八万劫を。その所説の法門の極理
 は、或は因中有果、或は因中無果、或は因中亦有果亦無果等云云。これ外道の極理なり。
 いわゆる善き外道は五戒・十善戒等を持ちて、有漏の禪定を修し、上色・無色をきわめ、
 上界を涅槃と立て屈歩虫のごとくせめのぼれども、非想天より返りて三悪道に墮つ。一人
 として天に留まるものなし。しかれども天を極むる者は永くかへらずとをもえり。各々
 自師の義をつけて堅く執するゆへに、或は冬寒に一日に三度恒河に浴し、或は髪をぬき、
 或は巖に身をなげ、或は身を火にあぶり、或は五処をやく。或は裸形、或は馬を多く殺
 せば福をう、或は草木をやき、或は一切の木を礼す。これらの邪義その数をしらず。師を
 恭敬すること諸天の帝釈をうやまい、諸臣の皇帝を拝するがごとし。

しかれども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死をはなれず。善師につかへては二生三生等に悪道に墮ち、悪師につかへては順次生に悪道に墮つ。外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。ある外道云く「千年已後仏出世す」等云云。ある外道云く「百年已後仏出世す」等云云。大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆これ仏説にして外道の説にあらず」等云云。法華經に云く「衆に三毒ありと示し、また邪見の相を現ず、我弟子かくのごとく方便して衆生を度す」等云云。

三には大覺世尊。これ一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。外典外道の四聖三仙、その名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、その名は賢なりといえども実には因果をわきまえざること嬰兒のごとし。彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷こゑがたし。我大師は変易なをわたり給へり。いわんや分段の生死をや。元品の無明の根本なをかたづけ給へり。いわんや見思枝葉の麤惑をや。

この仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十年が間一代の聖教を説き給へ

り。一字一句みな真言なり。一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すら、い
 うことあやまりなし。事と心と相符へり。いわんや仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人。
 されば一代五十余年の説教は外典外道に対すれば大乘なり。大人の実語なるべし。初成道
 の始より泥洹の夕にいたるまで、説くところの所説みな真実なり。ただし仏教に入つて
 五十余年の経々八万法蔵を勘えたるに、小乗あり大乘あり、権経あり実経あり、顕
 教密教、軟語麤語、実語妄語、正見邪見等の種々の差別あり。ただ法華経ばかり教主
 釈尊の正言なり。三世十方の諸仏の真言なり。大覚世尊は四十余年の年限を指て、その内
 の恒河の諸経を「未顕真実」、八年の法華は「要当説真実」と定め給しかば、多宝仏大地
 より出現して「皆是真実」と証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く。この
 言赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし。仰で信ぜ
 よ。伏て懐ふべし。

ただし、この経に二十の大事あり。俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をも
 しらず。華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗で自宗の骨目とせり。一念三千の法門はた
 だ法華経の本門寿命品の文の底にしづめたり。竜樹・天親知て、しかもいまだひろい
 ださず。ただ我が天台智者のみこれをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て十界をしらず。いわ
 んや互具をしるべしや。俱舎・成実・律宗等は阿含経によれり。六界を明て四界をしら
 ず。十方唯一仏、一方有仏だにもあかさず。一切有情悉有仏性とこそとかざらめ。一人
 の仏性なおゆるさず。しかるを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性など申すは仏滅後
 の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし。

例せば外典外道等は仏前の外道は執見あさし。仏後の外道は仏教をきゝみて自宗の非を
 しり、巧の心出現して仏教を盗み取り、自宗に入れて邪見もつともふかし。附仏教・学
 仏法成等これなり。

外典も又々かくのごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家は、いういうと
 して嬰兒のごとくはなかりしが、後漢已後に釈教わたりて対論の後、釈教やうやく
 流布する程に、釈教の僧侶破戒のゆへに、或は還俗して家にかへり、或は俗に心をあはせ、
 儒道の内に釈教を盗み入れたり。止觀の第五に云く、「今の世に多く悪魔の比丘ありて戒を
 退き家に還り、駟策を懼畏して更に道士に越濟す。また名利を邀めて莊老を誇談し、仏
 法の義を以て偷んで邪典に安き、高きを押して下きに就け、尊きを推きて卑きに入れ、概
 して平等ならしむ」云云。弘に云く「比丘の身と作つて仏法を破滅す。もしは戒を退き
 家に還るは、衛の元嵩等のごとし。即ち在家の身を以て仏法を破壊す。この人正教
 を偷窃して邪典に助添す。高きを押して等とは道士の心を以て二教の概となし、邪正を
 して等しからしむ。義この理なし。曾て仏法に入つて、正を偷んで邪を助け、八万・十
 二の高きを押して、五千・二篇の下に就け、用つて彼の典の邪鄙の教を釈するを『尊き
 を推きて卑きに入れ』と名づく」等云云。この釈を見るべし。次上の心なり。

仏教またかくのごとし。後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三・北七の異執をこりて蘭菊なりしかども、陳・隋の智者大師にうちやぶられて、仏法二び群類をすくう。

その後、法相宗・真言宗天竺よりわたり、華嚴宗また出来せり。これらの宗々の中に法相宗は一向天台宗に敵を成す宗、法門水火なり。しかれども玄奘三蔵・慈恩大師、委細に天台の御釈を見ける程に、自宗の邪見ひるがへるかのゆへに、自宗をばすてねどもその心天台の帰伏すと見へたり。華嚴宗と真言宗とは本は権經權宗なり。善無畏三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗みとて自宗の肝心とし、その上に印と真言とを加て超過の心ををこす。その子細をしらぬ学者等は、天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうちをもう。華嚴宗は澄觀が時、華嚴經の「心如工画師」の文に天台の一念三千の法門を偷み入れたり。人これをしらず。

日本我朝には華嚴寺の六宗、天台真言已前にわたりけり。華嚴・三論・法相、諍論水

火なりけり。伝教大師この国にいでて、六宗の邪見をやぶるのみならず、真言宗が天台の法華經の理を盗み取て自宗の極とする事あらはれをはんぬ。伝教大師宗々の人師の異執をすて、専ら經文を前として責させ給しかば、六宗の高徳八人・十二人・十四人・三百余人、並びに弘法大師等せめをとされて、日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州の山寺みな叡山の末寺となりぬ。また漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたる事もあらはれぬ。

また、その後やうやく世をとろへ、人の智あさくなるほどに、天台の深義は習うしないぬ。他宗の執心は強盛になるほどに、やうやく六宗七宗に天台宗をとされて、よわりゆくかのゆへに、結句は六宗七宗等にもをよばず。いうにかいなき禅宗・浄土宗にとされて、始は檀那やうやくかの邪宗にうつる。結句は天台宗の碩徳と仰がるゝ人々みなをちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに六宗八宗の田畠所領みなたをされ、正法失はてぬ。

天照太神・正八幡・山王等 諸の守護の諸大善神も法味をなめざるか、国中を去り給

かの故に、悪鬼便を得て国すでに破れなんとす。

ここに予、愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、その相違多しといえども、まづ世間の学者もゆるし、我が身にも、さもやとうちをばうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。

法華經の現文を拜見するに、舍利弗は華光如来、迦葉は光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、目連は多摩羅跋旃檀香仏、富楼那は法明如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百・七百は普明如来、学無学二千人は宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見如来、具足千万光相如来等なり。これらの人々は法華經を拜見したてまつるには尊きやうなれども、爾前の経々を披見の時はけを（興）さむる事どもをほし。その故は仏世尊は実語の人なり。故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし。これらの人々に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは申すぞかし。この大人、「ただ一大事の

因縁を以ての故に世に出現したもう」となひらせ給て、「いまだ眞實を顕わさず」、「世尊は法久しうして後、要すまさに眞實を説くべし」、「正直に方便を捨つ」等云云。多宝仏証明を加え、分身舌を出す等は、舍利弗が未来の華光如来、迦葉が光明如来等の説をば誰の人が疑網をなすべき。

しかれども爾前の諸経もまた仏陀の実語なり。大方広仏華嚴經に云く、「如来の智慧の大薬王樹はただ二処において生長の利益をなすこと能わず。いわゆる二乗の無為広大の深抗に墮つると、及び善根を壊れる非器の衆生の大邪見貪愛の水に溺るとなり」等云云。

この経文の心は雪山に大樹あり、無尽根となづく。これを大薬王樹と号す。閻浮提の諸木の中の大王なり。この木の高さは十六万八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木はこの木の根ざし枝葉華菓の次第に随て、華菓な（成）るなるべし。この木をば仏の仏性に譬へたり。一切衆生をば一切の草木にたとふ。ただ、この大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一閻提人の心中をば水輪にたとえたり。この二類は永く仏

になるべからずと申す経文なり。

大集経に云く、「二種の人あり。かならず死して活きず、畢竟して恩を知り恩を報ずること能わず。一には声聞、二には縁覚なり。譬ば人ありて深坑に墜墮し、この人自利し他を利用すること能わざるが如く、声聞・縁覚もまたまたかくのごとし。解脱の坑に墜して、自利し及び他を利用することあたわず」等云。

外典三千余卷の所詮に二つあり。いわゆる孝と忠となり。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天高けれども孝よりも高からず。また孝とは厚なり。地あつけれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでたり。いかにいわんや仏法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をほうずべし。その上舍利弗・迦葉等の二乗は二百五十戒・三千の威儀持整して、味・浄・無漏の三静慮、阿含経をきわめ、三界の見思を尽くせり。知恩報恩の人の手本なるべし。しかるを不知恩の人なりと世尊定め給ぬ。その故は父母の家を出て出家の身となるは必ず父母をすくはんがため

なり。二乗は自身は解脱とをもえども、利他の行かけぬ。たとい自分の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道に入れば、かへりて不知恩の者となる。

維摩經に云く「維摩詰また文殊師利に問う。何等をか如来の種となす。答えて曰く、一切塵勞の疇を如来の種となす。五無間を以て具すといえども、なお能くこの大道意を發

す」等云云。また云く「譬えば族姓の子、高原陸土には青蓮・芙蓉の衡華を生ぜず。

卑湿汗田に乃ちこの華を生ずるがごとし」等云云。また云く「すでに阿羅漢を得て応真となる者は、終にまた道意を起して仏法を具することあたわざるなり。根敗の土のその五

樂においてまた利することあたわざるがごとし」等云云。文の心は貪・瞋・痴等の三毒は

仏の種となるべし、殺父等の五逆罪は仏種となるべし。高原の陸土には青蓮華生ずべし。

二乗は仏になるべからず。いう心は二乗の諸善と凡夫の悪と相對するに、凡夫の悪は仏にならざるも二乗の善は仏にならじとなり。諸の小乗經には悪をいましめ善をほむ。この經

には二乗の善をそしり凡夫の悪をほめたり。かへて仏經ともをばへず、外道の法門のや

うなれども、詮ずるところは二乗の永不成仏をつよく定めさせ給にや。

方等陀羅尼經に云く、「文殊、舍利弗に語らく、なお枯れたる樹のごとく更に華を生ずるやいなや。また、山水のごとく本処に還るやいなや。折れたる石、還つて合うやいなや。焦れる種芽を生ずるやいなや。舍利弗の言く、否なり。文殊の言く、もし得べからずんば、云何ぞ我に菩提の記を得るを問うて、歡喜を生ずるや不や」等云。文の心は、枯れたる木華さかず、山水山にかへらず、破たる石あはず、いれる種をいず、二乗またかくのごとし。仏種をいれり等となん。

大品般若經に云く、「諸の天子、今未だ三菩提心を発さざる者、まさに発すべし。もし声聞の正位に入れば、この人能く三菩提心を発さざるなり。何を以ての故に。生死のために障隔を作すが故に」等云。文の心は二乗は菩提心をこそさざれば我隨喜せじ、諸天は菩提心をこそせば我隨喜せん。

首楞嚴經に云く、「五逆罪の人はこの首楞嚴三昧を聞いて、阿耨菩提心を発せば還つて仏

と作るを得ん。世尊、漏尽の阿羅漢はなお破器のごとく、永くこの三昧を受くるに堪忍せず」等云云。

浄名經に云く「それ汝に施す者は福田と名づけず。汝を供養せん者は三惡道に墮す」等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に墮つべしとなり。これらの聖僧は仏陀を除きたてまつりては人天の眼目、一切衆生の導師とこそをもひしに、幾許の人天大会の中にして、かう度々仰せられしは本意なかりし事なり。ただ詮ずるところは、我御弟子を責めころさんとにや。

このほか牛・驢二乳、瓦器・金器、螢火・日光等の無量の譬えをとて二乗を呵責せさせ給き。一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一經二經ならず、四十余年が間、無量無辺の經々に、無量の大会の諸人に対して、一言もゆるし給事もなく、そしり給しかば、世尊の不妄語なりと我も知る、人も知る、天も知る、地も知る。一人二人ならず百千万人、三界の諸天・竜神・阿修羅・五天・四州・六欲・色・無

色・十方世界より雲集せる人天・二乗・大菩薩等、皆これをしる、また皆これをきく。
 各々国々へ還りて、娑婆世界の釈尊の説法を彼々の国々にして一々にかたるに、十方無辺
 の世界の一切衆生一人もなく、迦葉・舍利弗等は永不成仏の者、供養してはあしかりぬ
 べしとしりぬ。

しかるを後八年の法華經に忽に悔還して、二乗作仏すべしと仏陀とかせ給はんに、人天
 大会信仰をなすべしや。用ゆべからざる上、先後の經々に疑網をなし、五十余年の説教み
 な虚妄の説となりなん。されば「四十余年未顕眞実」等の經文はあらまさせか。天魔の仏
 陀と現じて後八年の經をばとかせ給かと疑網するところに、げに／＼しげに劫国名号と
 申して、二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給へば、教主
 釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者
 と咲いしことこれなり。人天大会けを（興）さめてありし程に、その時に東方宝淨世界
 の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の大七宝塔に乗じて、教主釈尊の人天大会

に自語相違をせめられて、とのべ（左宣）かうのべ（右述）、さま／＼に宣させ給いしかども、不審なをはるべしともみへず、もてあつかいてをはせし時、仏前に大地より涌现して虚空にのぼり給う。例せば暗夜に満月の東山より出るがごとし。七宝の塔大虚にかゝらせ給いて、大地にもつかず大虚にも付かせ給はず、天中に懸りて、宝塔の中より梵音声を出して証明して云く、「爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言わく、善哉善哉。釈迦牟尼世尊、能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華経を以て、大衆のために説きたもう。かくのごとしかくのごとし、釈迦牟尼世尊、所説のごときは皆これ眞実なり」等云云。

また云く「爾の時に世尊、文殊師利等の無量百千万億旧住娑婆世界の菩薩乃至人非人等の一切の衆の前にいて大神力を現じたもう。広長舌を出して、上梵世に至らしめ、一切の毛孔より、乃至十方世界衆の宝樹の下の師子の座の上の諸仏もまたまたかくのごとく広長舌を出し、無量の光を放ちたもう」等云云。また云く「十方より来りたまえる諸の

分身ぶんじんの仏をして、各おの本土のに還らしむ。乃至多宝仏の塔、還かえつて故もとのごとくしたもうべし」
等云云。

大覺だいがく世尊しよじよつとん初成道しよじよつとんの時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭いゆし給う上、諸の大菩薩を遣つかしき。般若經の御時は釈尊長舌を三千にをほひ、千仏十方に現じ給う。金光明經には四方の四仏現ぜり。阿彌陀經には六方の諸仏舌を三千にををう。大集經だいじつきよつには十方の諸仏菩薩大宝坊だいほうぼうにあつまれり。

これらを法華經に引き合せてかんがうるに、黃石わうせきと黃金わうごんと、白雲はくうんと白山はくざんと、白氷はくひやうと銀鏡ぎんきやうと、黒色こくしよくと青色せいしよくとをば、翳眼えいがんの者みようもく・眇目みようもくの者いちげん・一眼いちげんの者じゃげん・邪眼じゃげんの者はみたがへつべし。

華嚴經には先後の經なければ仏語相違なし。なにゝつけてか大疑たいぎいで来くべき。大集經だいじつきよつ・小品經ほんきよつ・金光明經・阿彌陀經等は諸の小乘經の二乗を彈たん呵がせんがために十方に淨土をとき、凡夫・菩薩を欣慕しんぼせしめ、二乗をわづらはす。小乘經と諸大乘經と一分いちぶんの相違あるゆへに、或は十方に仏現ほとけじ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方世界にもこの經をと

くよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給う。或は釈尊舌を三千にをほひ、或は諸仏の舌をいだすよしをとかせ給う。これひとえに諸の小乗經の「十方世界に唯一仏のみ有り」ととかせ給しをもひをやぶるなるべし。法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違出來して、舍利弗等の諸の声聞・大菩薩・人天等に「將に魔の仏と作るに非ずや」とをもはれさせ給う大事にはあらず。しかるを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼々の經々と法華經とは同じとうちをもへるは、つたなき眼なるべし。

ただし在世は四十余年をすてて法華經につき候ものもやありけん。仏滅後にこの經文を開見して信受せんことかたかるべし。まづ一には爾前の經々は多言なり、法華經は一言なり。爾前の經々は多經なり、この經は一經なり。彼々の經々は多年なり、この經は八年なり。仏は大妄語の人永く信ずべからず。不信の上に信を立てば爾前の經々は信ずる事もありなん。法華經は永く信ずべからず。当世も法華經をばみな信じたるやうなれども、法華經にてはなきなり。その故は法華經と大日經と、法華經と華嚴經と、法華經と阿弥陀經

と一なるやうをとく人をば悦で歸依し、別々なるなんど申す人をば用いず。たとい用ゆれども本意なき事とをもへり。

日蓮云く、日本に仏法わたりてすでに七百余年、ただ伝教大師一人ばかり法華經をよめりと申すをば、諸人これを用ず。ただし法華經に云く、「もし須弥を接て他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ為れ難しとせず。乃至もし仏滅後に惡世の中において、能くこの經を説かん、これ則ち為れ難し」等云云。日蓮が強義、經文には普合せり。法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし。正法の者は爪上の土のごとしと、とかれて候はいかんがし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よく／＼思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道先をすべし。聖人の世に法華經の実義顯るべし等と心うべし。この法門は迹門と爾前と相對して爾前の強きやうにをぼう。もし爾前つよるならば、舍利弗等の諸の二乗は永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給らん。

二には、教主釈尊は住劫第九の滅、人壽百歳の時、師子頰王には孫、淨飯王には嫡子、童子悉達太子一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して、十玄六相・法界円融・頓極微妙の大法を説給い、十方の諸仏も顕現し、一切の菩薩も雲集せり。土といひ、機といひ、諸仏といひ、始といひ、何事につけてか大法を秘し給うべき。されば経文には「自在力を顕現し、為に円満経を説く」等云云。一部六十卷は一字一点もなく円満経なり。たとへば如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ。一珠も万宝を尽して雨し、万珠も万宝を尽すがごとし。華嚴経は一字も万字もただ同事なるべし。「心仏及衆生」の文は華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候へ。これら程いみじき御経に何事をか隠すべき。なれども二乘闡提不成仏ととかれしは珠のきずとみゆる上、三処まで始成正覚とならせ給て久遠実成の寿量品を説き

かくさせ給き。珠たまの破われたると、月に雲のかゝれると、日の蝕しやくしたるがごとし。不思議なりしことなり。

阿含・方等・般若・大日経等は仏説なればいみじき事なれども、華嚴経にたいすればいにかいなし。かの経に秘せんこと、これらの経々にとかるべからず。されば諸もろもろ阿含経に云く「初はじめて成道して」等云云。大集経に云く「如来成道して始はじめて十六年」等云云。浄名経に云く「始め仏樹に坐して力魔ちゆうまを降す」等云云。大日経に云く「我昔われ道場に坐して」等云云。般若仁王経にんにんおうきやうに云く「二十九年」等云云。これらは言うにたらず。ただ耳目じもくををどろかす事は、無量義経に華嚴経の唯心法界ゆいしんぽうがい、方等般若経ほうとうぼんげきやうの海印三昧かいいんさんまい・混同無二等こんどうむにとうの大法だいぽうをかきあげて、或は「未顕真実」或は「歴劫修行りやくこつしゆぎやう」等下程くだすほどの御経おんきやうに、「我先われさきに道場菩提樹もへつじゆの下もとに端坐たんざすること六年、阿耨多羅三藐三菩提あうたらかさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得たり」と初成道しよじやうどうの華嚴経の始成しじやうの文もんに同ぜられし、不思議と打思うちおもどころに、これは法華経の序分じよぶんなれば正宗しよしゆんの事をばいわずもあるべし。

法華經の正宗、略開三・広開三の御時、「唯仏と仏とのみ乃し能く諸法の実相を究尽す」等、「世尊は法久しうして後」等、「正直に方便を捨てて」等、多宝仏 迹門八品を指て「皆是真實なり」と証明せられしに何事をか隠すべき。なれども久遠寿命をば秘せさせ給て、「我始め道場に坐し樹を觀じてまた經行す」等云云。最第一の大不思議なり。されば弥勒菩薩涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を、仏「爾して乃ちこれを教化して初めて道心を發さしむ」等とかせ給いしを疑て云く「如来太子たりし時、釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。これより已來、始めて四十余年を過ぎたり。世尊云何ぞこの少時において大に仏事を作したまえる」等云云。教主釈尊これらの疑いを晴さんがために寿命品をとかんとして、爾前迹門のきゝ（所聞）を挙て云く、「一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云云。正しくこの疑いに答て云く「しかるに善男子、

我^{われ}實^{じつ}に成^な仏^{ぶつ}してより已^{この}來^{かた}、無^む量^{りやう}無^む辺^{へん}百^{ひやく}千^{せん}萬^{まん}億^{おく}那^な由^{ゆう}他^た劫^{こつ}なり」等^と云^い云^い。

華^か嚴^{げん}ないし般^{ぱん}若^{じやく}・大^{だい}日^{にち}經^{きやう}等^とは二^に乘^{じやう}作^{さく}仏^{ぶつ}を隱^{かく}すのみならず、久^く遠^{えん}實^{じつ}成^{じやう}をときかくさせ給^{たま}へり。これらの経^{きやう}々に二^につ^つの失^{しつ}あり。一^{いつ}には「行^{ぎやう}布^ぶを存^{ぞん}する故^{ゆゑ}に、なおいまだ權^{けん}を開^かせず」。迹^{せき}門^{もん}の一^{いつ}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}をかくせり。二^にには「始^し成^{じやう}を言^いう故^{ゆゑ}に曾^{かつ}ていまだ迹^{せき}を發^{はつ}せず」。本^{ほん}門^{もん}の久^く遠^{えん}をかくせり。これらの二^につ^つの大法^{だいほう}は一^{いつ}代^{だい}の綱^{こつ}骨^{こつ}・一^{いつ}切^{せつ}經^{きやう}の心^{しん}髓^{ずい}なり。

迹^{せき}門^{もん}方^{ほう}便^{べん}品^{ぽん}は一^{いつ}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}・二^に乘^{じやう}作^{さく}仏^{ぶつ}を説^とて爾^に前^{ぜん}二^に種^{しゆ}の失^{しつ}一^{いつ}つを脱^{だつ}れたり。しかりといえどもいまだ發^{はつ}迹^{せき}顯^{けん}本^{ほん}せざれば、まことの一念^{いつねん}三^{さん}千^{せん}もあらはれず、二^に乘^{じやう}作^{さく}仏^{ぶつ}も定^{ぢやう}まらず、水^{すい}中の月^{げつ}を見る^{みる}がごとし。根^{こん}なし草^{そう}の波^は上^{じやう}に浮^うるにいたり。本^{ほん}門^{もん}にいたりて、始^し成^{じやう}正^{じやう}覺^{かく}をやぶれば、四^し教^{きやう}の果^{くわ}をやぶる。四^し教^{きやう}の果^{くわ}をやぶれば、四^し教^{きやう}の因^{いん}やぶれぬ。爾^に前^{ぜん}迹^{せき}門^{もん}の十^{じゅう}界^{かい}の因^{いん}果^{くわ}を打ちやぶて、本^{ほん}門^{もん}十^{じゅう}界^{かい}の因^{いん}果^{くわ}をとき顯^{あら}わす。これ即^{すなわ}ち本^{ほん}因^{いん}本^{ほん}果^{くわ}の法^{はふ}門^{もん}なり。九^く界^{かい}も無^む始^しの仏^{ぶつ}界^{かい}に具^ぐし、仏^{ぶつ}界^{かい}も無^む始^しの九^く界^{かい}に備^{そな}わりて、真^{まこと}の十^{じゅう}界^{かい}互^あ具^あ・百^{ひやく}界^{かい}千^{せん}如^に・一^{いつ}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}なるべし。

かうてかへりみれば、華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿弥陀經の、大日經等の権仏等は、この寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給うを、諸宗の学者等近くは自宗に迷い、遠くは法華經の寿量品をしらず、水中の月に実月の想をなし、或は入て取んとをもひ、或は繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云く、「天月を識らずして、ただ池月を觀ず」等云云。

日蓮案じて云く、二乗作仏すらなお爾前づよにをばゆ。久遠実成はまたにるべくもなき爾前づりなり。その故は爾前と法華と相對するになお爾前こわ（強）き上、爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除ては皆始成を存せり。双林最後の大般涅槃經四十卷・その他の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の頭本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、ただ涌出・寿量の二品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は西天の仏滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率

の内院にのぼり、弥勒菩薩に^{たいめん}対面して一代^{いちだい}聖教^{せいぎょう}の不審をひらき、昼は阿輸舎国^{あしゆしゃこく}にして法相の法門を弘め給う。かの御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかたづけ、五天^{ごてん}幢^{じょう}を倒してこれに^{かたづけ}帰依す。戸那国の玄奘三蔵、月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国々を見きつて、諸宗をばふりすて、この宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王にさづけ給い、肪・尚・光・基を弟子として大慈恩寺並に三百六十余箇国に弘め給う。日本国には人王三十七代孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺^{やましなでら}にあがめ給へり。三国第一の宗なるべし。この宗の云く、始め華嚴経より終り法華・涅槃経にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は^{なが}永く^{ほとけ}仏になるべからず。仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給ぬる上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く^{へんかい}変改有るべからず。されば法華経・涅槃経の中にも、爾前の経々に^{きらい}嫌し^{むね}無性有情・決定性を正くついでして成仏すとはとかれず。まづ眼を閉て案ぜよ。法華経・涅槃経に決定性・無性有情、正く^{まじ}仏になるならば、無著・世親ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの

三蔵人師さんざうにんし、これをみざるべしや。これをのせざるべしや。これを信じて伝えざるべしや。彌勒菩薩みらくぼさつに問いたてまつらざるべしや。汝は法華經の文もんに依るやうなれども、天台・妙樂・伝教の僻見びやくけんを信受しんじゆして、その見けんをもつて經文をみるゆえに、爾前に法華經は水火なりと見るなり。

華嚴宗と真言宗は法相・三論にはにるべくもなき超過ちやうかの宗なり。二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず、華嚴經・大日經に分明ぶんみやうなり。華嚴宗の杜順とじゆん・智儼ちげん・法蔵・澄觀、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は天台・伝教にはにるべくもなき高位の人、そのうえ善無畏等は大日如来より糸みだれざる相承さうじやうあり。これらの権化ごんげのいいかでか悞あやまりあるべき。随したがつて華嚴經には「或は釈迦、仏道を成じやうじ已おわつて不可思議劫を經るを見る」等云云。大日經には「我われは一切の本初ほんしよなり」等云云。なんぞただ久遠実成、寿量品に限らん。たとえば井底せいぞいの蝦かえるが大海だいかいを見ず、山左やまかつが洛中らくちゆうをしらざるがごとし。汝ただ寿量じゆりやうの一品いっほんを見て、華嚴・大日經等の諸經をしらざるか。そのうえ月氏げつし・尸那しな・新羅・百濟等にも一同に二乗作仏・

久遠実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年はちかねんの經は四十余年の經々には相違せりといふとも、先判せんぱん・後判ごはんの中には後判ごはんにつくべしといふとも、なお爾前にんぜんづりにこそをぼうれ。また、ただ在世だいせいばかりならばさもあ
るべきに、滅後めつごに居こせる論師ろんじ・人師にんし・多おおくは爾前にんぜんづりにこそ候そうかうへ。かう法華經は信じがた
き上、世もやうやく末まへになれば、聖賢せいけんはやうやくかくれ、迷者めいじやはやうやく多し。世間の浅
き事ことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや出世しゅつせの深法じんぽう 悞ごなかるべしや。犢子とくし・方広ほうこう
が聡敏そうびんなりし、なお大小だうこ 乘經じやうぎやうにあやまてり。無垢むこ・摩沓またつが利根りこんなりし、権実こんじつ二教にきやうを弁わきまえ
ず。正法しやうぽう一千年の内うちは在世だいせいも近く、月氏げつしの内うちなりし、すでにかくのごとし。いわんや尸那しな
・日本等にっぽんは国くにもへだて、音おんもかはれり。人の根こんも鈍どんなり。寿命じゆみやうも日ひあさし。貪瞋痴とんじんちも倍
増ぞうせり。仏世ぼつせを去さてとし久し。仏經ぶつぎやうみなあやまれり。誰たれの智解ちげが直なおかるべき。仏涅槃經ぶつねはんぎやう
に記きして云く、「末法まふぽうには正法しやうぽうの者は爪上つめじやうの土つち、謗法ぼうぽうの者は十方じつぱうの土つち」とみへぬ。法滅ぽうめつ
尽經じんぎやうに云く、「謗法ぼうぽうの者は恒河沙こうがしゃ、正法しやうぽうの者は一二いちにの小石せうせき」と記きしをき給たまう。千年せんねん・五

百年に一人なんども正法の者ありがたからん。世間の罪に依て悪道に墮る者は爪上の土、
 仏法にて悪道に墮る者は十方の土。俗より僧、女より尼多く悪道に墮つべし。

ここに日蓮案じて云く、世すでに末代に入て二百余年、辺土に生をうく。そのうえ下賤、
 そのうえ貧道の身なり。輪回六趣の間には人天の大王と生て、万民をなびかす事、大風
 の小木の枝を吹がごとくせし時も仏にならず。大小乗經の外凡・内凡の大菩薩と修しあ
 がり、一劫・二劫・無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入ぬべかりし時も、強盛
 の悪縁にをとされて仏にもならず。しらず大通結縁の第三類の存世をもれたるか、久遠
 五百の退転して今に来るか。

法華經を行ぜし程に、世間の悪縁・王難・外道の難・小乗經の難などは忍し程に、權
 大乘・実大乘經を極めたるやうなる道綽・善導・法然等がごとくなる悪魔の身に入りた
 る者、法華經をつよくほめあげ、機をあなたがちに下し、「理深解微」と立て、「未有一人得者」
 「千中無一」等とすかししものに、無量生が間、恒河沙の度すかされて權經に墮ぬ。

権経より小乘経に堕ぬ。外道外典に堕ぬ。結句は悪道に堕けりと深くこれをしれり。

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華経・涅槃経等にこの二辺を合せ見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必ず無間地獄に堕べし。いうならば三障四魔必ず競い起るべしとし（知）ぬ。二辺の中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくは一度に思い止むべし、と且くやすらいし程に、宝塔品の六難九易これなり。われら程の小力の者須弥山はなぐとも、われら程の無通の者 乾草を負て劫火にはやけずとも、われら程の無智の者恒沙の経々をばよみをぼうとも、法華経は一句一偈も末代に持ちがたしと、とかるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。

すでに二十余年が間この法門を申すに、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに

我が身命しんみょうに及ぶ。そのうえ弟子といひ、檀那だんなといひ、わづかの聴聞ちようもんの俗人ぞくじんなど来て重科じゆうかに行おこなわる。謀反むほんなんどの者のことし。

法華經の第四に云く、「しかもこの經は如来の現在すらなお怨嫉おんしつ多し、いわんや滅度の後のちをや」等云云。第二に云く、「經を讀誦どくじゆし書持しよじすることあらん者を見て、輕賤きようせん憎嫉ぞうしつして結恨けつこんを懷いだかん」等云云。第五に云く、「一切世間怨多あだくして信じ難がたし」等云云。また云く、「諸の無智むちの人の悪口あつく罵詈めりとう等するあらん」。また云く、「国王・大臣・婆羅門・居士こじに向つて誹謗ひぼうして我が悪を説いて、これ邪見の人なりと謂わん」。また云く、「数数しばしば擯出ひんすいせられん」等云云。また云く、「杖木瓦石じようもくがしやくもてこれを打擲うちちやくせん」等云云。涅槃經に云く、「爾その時に多く無量の外道あつて、和合して共に摩訶陀まかだの国王あじやせ阿闍世あせの所に往ゆく。今は唯ただ一ひとの大悪人くどんしやもんあり瞿曇沙門くどんしやもんなり。一切世間の悪人、利養のための故に、その所に往集けんぞくし眷屬けんぞくとなつて、能く善を修しゆせず。呪術の力の故に、迦葉及び舍利弗・目犍連もつけんれんを調伏ちようぶつす」等云云。天台云く、「いかにいわんや未来をや。理、化けしがたきに在り」等云云。妙樂云く、「障さわりい

まだ除かざる者を怨おんとなし、聞くを喜ばざる者を嫉しづと名づく」等云云。南三北七の十師
 ・漢土無量の学者、天台を怨敵おんてきとす。得一とくいつ云く「咄つたないかな智公ちこう、汝はこれ誰たが弟子ぞ。

三寸に足らざる舌根ぜつこんを以て、覆面舌ふめんぜつの所説ほつを謗ほうずる」等云云。

東春とうしゆんに云く「問う、在世の時、許多あまたの怨嫉おんしづあり。仏滅度の後、この經を説く時、何が故

ぞまた留難るなん多きや。答えて云く、俗に言うがごときは良薬は口に苦にがしと。この經五乘いの異

執しゆつを廢して一極いちごくの玄宗げんしゆを立つるが故に凡そしを斥しり聖しやうを呵かし、大はらを排はらい小せうを破やぶり、天魔てんまを

銘なづけて毒虫どくちゆうとなし、外道を説いて悪鬼あくきとなし、執しゆつ小せうを貶せしつて貧賤びんせんとなし、菩薩ぼさつを拙はじしめ

て新学しんがくとなす。故に天魔は聞くを悪にくみ、外道は耳みみに逆さから、一乘きやうは驚怪きやうけし、菩薩ぼさつは怯行きやうぎやう

す。かくのごときの徒やから、悉く留難るなんをなす。多怨嫉たおんしづの言ごん、あに唐わなしからんや」等云云。

顯戒論けんかいろんに云く「僧統そうとう奏して曰く、西夏せいかにに鬼弁きべん婆羅門ばらもんあり、東土とうどに巧言ぎやうげんを吐はく禿頭とくずの沙門しゃもん

あり。これすなわち物類もつるい冥みやう召しやうして世間よこを誑惑おびやす等云云。論じて云く、昔は齊朝せいぢやうの光統こうとう

を聞き、今は本朝ほんぢやうの六統ろくとうを見る。実まじなるかな、法華のいかにいわんや」等云云。秀句しゆくに

云く、「代を語れば則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪争の時なり。經に云く「猶多怨嫉、況滅度後」。この言良に以あるなり」等云云。

それ小児に灸治を加れば必ず母をあだむ。重病の者に良薬をあたうれば定めて口に苦しとうれう。在世なをしかり。ないし像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人、法華經一切經をよめり。南北これをあだみしかども、陳・隋二代の聖主眼前に是非を明めしかば敵ついに尽きぬ。像の末に伝教一人、法華經一切經を仏説のごとく読み給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武ないし嵯峨等の賢主我と明らめしかばまた事なし。

今末法の始め二百余年なり。況滅度後のしるしに鬪争の序となるべきゆへに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合せられずして流罪ないし寿にもをよばんとするなり。

されば日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈

悲のすぐれたる事はそれをもいだきぬべし。定さだんで天の御計おんはからいにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよ／＼重科じゆうかに沈む。還かえりてこの事を計はかりみれば我身わがの法華經の行者にあらざるか。また諸天善神等のこの国をすてゝ去り給へるか。かたゞ／＼疑はし。しかるに法華經の第五まきの卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにもこの国に生れずは、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪こまつざいにも墮おちぬべし。經に云く「有諸無智人惡口罵詈等しよむちになあつくめりととう」、「加刀杖瓦石かとうじようがしやく」等云云。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等くわえを加くわえらるる者ある。日蓮なくばこの一偈いちげの未來記は妄語となりぬ。「惡世あくせの中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんきよくに」。また云く「白衣びやくゑのために法を説いて、世に恭敬くきやうせらるること六通の羅漢のごとくならん」。これらの經文は、今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師なくば世尊はまた大妄語の人、「常に大衆だいしゆの中に在うちつて、乃至國王・大臣・婆羅門居士に向つて」等、今の世の僧等日蓮を讒奏さんそうして流罪りうざいせずばこの經文むなし。また云く「数数しばしば擯出ひんしゅつ

せられん」等云云。日蓮、法華經のゆえに度々ながされずば数々の二字いかんがせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給はず。いわんや余人をや。末法の始のしるし、「恐怖悪世中」の金言のあふゆへに、ただ日蓮一人これをよめり。例せば世尊が付法蔵經に記して云く、「我滅後一百年に阿育大王という王あるべし」。摩耶經に云く、「我滅後六百年に竜樹菩薩という人南天竺に出べし」。大悲經に云く、「我滅後六十年に末田地という者地を竜宮につ（築）くべし」。これら皆仏記のごとくなりき。しからずば誰か仏教を信受すべき。しかるに仏、「恐怖悪世」「然後未來世」「末世法滅時」「後五百歳」など正・妙の二本に正しく時を定めたもつ。

当世法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。南三北七、七大寺等なお像法の法華經の敵の内、いかにいわんや当世の禪・律・念仏者等は脱べしや。經文に我が身普合せり。御勘氣をかほ（蒙）ればいよ／＼悦びをますべし。例せば小乗の菩薩の未断惑なるが「願兼於業」と申して、つくり

たくなき罪なれども、父母等の地獄に墮て大苦をつくるを見て、かたのごとくその業を造つて、願て地獄に墮て苦に同じ、苦に代れるを悦びとすることがごとし。これもまたかくのごとし。当時の責はたう（堪）べくもなけれども、未来の悪道を脱すらんとをもえば悦ぶなり。

ただし世間の疑といひ、自心の疑いと申し、いかでか天扶け給ざるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言あり。法華經の行者にはさるになりとも法華經の行者とがう（号）して、早々に仏前の御誓言をとげんとこそをばすべきに、その義なきは我身法華經の行者にあらざるか。この疑はこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをかく上、疑を強くして答をかまうべし。

季札といひし者は心のやくそく（約束）をたがへじと、王の重宝たる劍を徐君が塚にかく。王寿と云いし人は河の水を飲んで金の鷲目を水に入れ、公胤といひし人は腹をさいて主君の肝を入れる。これらは賢人なり。恩をほう（報）ずるなるべし。

いわんや舍利弗・迦葉等の大聖は二百五十戒・三千の威儀一つもかけず、見思を断じ
 三界を離れたる聖人なり。梵・帝・諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに四十余年
 が間、永不成仏と嫌いすてはてられてありしが、法華經の不死の良薬をなめて燋種の生、
 破石の合、枯木の華菓などせるがごとく、仏になるべしと許されて、いまだ八相をと
 なえ（唱）ず、いかでかこの經の重恩をばほうぜざらん。もしほうぜずば彼々の賢人に
 もをとりて、不知恩の畜生なるべし。毛宝が龜はあを（襖）の恩をわすれず、昆明池の大魚
 は命の恩をほうぜんと明珠を夜中にさゝげたり。畜生すらなお恩をほうず。いかにい
 わんや大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王の孫なり。人中に家
 高き上、証果の身となつて成仏ををさへ（抑）られたりしに、八年の靈山の席にて山海慧
 ・蹈七宝華など如来の号をさづけられ給う。

もし法華經ましまさずは、いかにいえたか（家高）く大聖なりとも、誰か恭敬したてまつ
 るべき。夏の桀・殷の紂と申すは万乗の主、土民の帰依なり。しかれども政あしく

して世をほろぼせしかば、今にわるきものゝ手本には架紵架紵とこそ申せ。下賤げせんの者・癩病らいびょうの者も架紵のごとしといはれぬればのられ(罵)たりと腹たつなり。千二百無量の声聞は法華経ましまさずば、誰たれか名をもきくべき、その音こえをも習うべき。一千の声聞、一切経を結集けつじゆせりとも見る人もよもあらず。ましてこれらの人々を絵像えぞう・木像もくぞうにあらわして本尊ほんぞんと仰あおぐべしや。これ偏に法華経の御力おんちからにて、一切の羅漢らかん帰依せられさせ給たまなるべし。諸もろもろの声聞、法華をはなれさせ給たまなば、魚うおの水をはなれ、猿さるの木をはなれ、小児しょうじの乳をはなれ、民たみの王をはなれたるがごとし。いかでか法華経の行者をすて給たまべき。

諸もろもろの声聞は爾前の経々にては肉眼にくげんの上に天眼てんげん・慧眼えげんをう(得)。法華経にして法眼ほうげん・仏眼ぶつげん備そなれり。十方世界じふぱうすらなお照見しやうけんし給たまらん。いかにいわんやこの娑婆世界さばの中、法華経の行者を知見せられざるべしや。たとひ日蓮悪人にて一言二言、一年二年、一劫二劫、ないし百千万億劫これらの声聞を悪口罵詈たてまつりし奉、刀杖を加えまいらする色いろなりとも、法華経をだにも信仰したる行者ならばすて給たまべからず。たとへば幼おきなま稚まの父母をのる、

父母これをすつるや。梟鳥が母を食う、母これをすてず。破鏡父をがい（害）す、父これにしたがふ。畜生すらなおかくのごとし。大聖法華經の行者を捨つべしや。

されば四大声聞の領解の文に云く、「我等今者、真にこれ声聞なり。仏道の声を以て一切をして、開かしむべし。我等今者、真に阿羅漢なり。諸の世間、天・人・魔・梵において普くその中においてまさに供養を受くべし。世尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して、我等を利益したもつ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。手足をもて供給し、頭頂をもて礼敬し、一切をもて供養すとも、皆報ずること能わじ。もしは以て頂戴し、両肩に荷負して恒沙劫において、心を尽して恭敬し、また美膳無量の宝衣、及び諸の臥具、種種の湯薬を以てし、牛頭栴檀及び諸の珍宝を以て塔廟を起て、宝衣を地に布き、かくのごとき等の事、もつて供養すること恒沙劫においてすとも、また報ずること能わじ」等云云。

諸の声聞は前四味の経々にいくそばくぞ（幾許）の呵嘖を蒙り、人天大会の中にして恥

辱じやくがましき事その数をしらず。しかれば迦葉尊者の涕泣ていきゆうの音は三千をひびかし、須菩提しゆぼだい尊者は亡然ぼんぜんとして手の一鉢じつぱつをす（捨）つ。舍利弗は飯食はんじきをは（吐）き、富樓那ふるなは画瓶がびように糞ふんを入いると嫌きらわる。世尊そくやおん、鹿野苑ろくやおんにしては阿含經あがんきやうを讚歎さんたんし、二百五十戒にひゃくごじゆうかいを師とせよ、なんど慇懃おんこんにほめさせ給たまて、今またいつのまに我所説わがをば、かうはそしらせ給たまと、二言相違にこんそういの失とがとも申まぬべし。

例せば世尊、提婆達多ていばだつたを汝愚人になり、人の唾つばを食くうと罵詈めりせさせ給たましかば、毒箭どくせんの胸むねに入いるがごとくをもひて、うらみて云く、瞿雲くどんは仏陀ぶつだにはあらず。我われは斛飯王こくほんのうの嫡子ちやくし、阿難尊あなんそん者が兄あに、瞿雲くどんが一類いれいなり。いかにあしき事ありとも内内教訓ないないすべし。これら程にんてんだいえの人天大会にんてんだいえに、これ程たいかの大禍たいかを現むかに向むかて申すもの大人だいにん仏陀ぶつだの中ちゆうにあるべしや。されば先先さきさきは妻つまのかたき、今は一座いざのかたき、今日けふよりは生々しんしん世々じよじよに大怨敵だいはんてきとなるべしと誓ちかいしぞかし。

これをもつて思うに、今諸いましよの大声聞おほいしやうもんは本もとと外道婆羅門がいでんばらもんの家いへより出いでたり。また諸いましよの外道がいでんの長者ちやうじやうなりしかば諸王しよおうに帰依きいせられ諸檀那しよだんなにたと（尊）まる。或あるは種姓しゆじやう高貴かうきの人もあり、

或は富福充満のやからもあり。しかるに彼々の栄官等をうちすて慢心の幢を倒して、俗服を脱ぎ壊色の糞衣を身にまとひ、白弘弓箭等をうちすて、一鉢を手ににぎり、貧人乞丐なんどのごとくして、世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、生命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海みな外道の弟子檀那なれば仏すら九横の大難にあひ給ふ。いわゆる提婆が大石をとばせし、阿闍世王の醉象を放し、阿耆多王の馬麦、婆羅門城のこんづ(漿)、せんしゃ(旃遮)婆羅門女が鉢を腹にふせし、いかにいわんや所化の弟子の数難申すばかりなし。無量の釈子は波瑠璃王に殺され、千万の眷属は醉象にふまれ、華色比丘尼は提多にがい(害)せられ、迦盧提尊者は馬糞にうづまれ、目犍尊者は竹杖にがいせらる。

そのうえ六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云く、瞿雲は閻浮第一の大悪人なり。彼がいたる処は三災七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし。瞿雲がところには衆悪をあつめたり。いわゆる迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり。

人身にんしんを受けたる者は忠孝を先とすべし。彼らは瞿曇くどうんにすかされて、父母の教訓をも用いず家をいで、王法おうほうの宣をもそむいて山林にいたる。一国あつこに跡をとどむべき者にはあらず。されば天には日月衆星にちがつしゆせいへん変をなす、地には衆天しゆてんさかななり、なんどうつたう。堪たうべしともおぼへざりしに、またうちそ(添)うわざわいと仏陀にもうちそひ(副)がたくてありしなり。人天大会の衆会しゆえの砌みきりにて時々呵嘖かしゃくの音をきゝしかば、いかにあるべしともおぼへず。ただあわつる(狼狽)心のみなり。

そのうえ大だいの大難の第一なりしは浄名經の「それ汝なんぢに施ほたす者は福田ふくでんと名づけず、汝を供養する者は三悪道に墮だす」等云云。文もんの心は仏、菴羅苑あんらおんと申すところをはせしに、梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・三界諸天さんがいしよてん・地神ちじん・竜神りゆうじん等無数恒沙むしゆこじやの大会たいえの中うちにして云く、須菩提しゆぼだい等の比丘等を供養せん天人は三悪道に墮おつべし。これらをうちきく天人、これらの声聞を供養すべしや。詮するところは仏の御言みごいを用もちて諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ。心あらん人々は仏をもうとみぬべし。さればこれらの人々は仏を供養したてまつりしついで

にこそ、わづかの身命しんみょうをも扶たすけさせ給たまいしか。されば事の心を案あずるに、四十余年の経々のみとかれて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ごにりよくならせ給たまいたらましかば、誰の人かこれらの尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそをはすべけれ。

しかるに四十余年の経々をば東春とうしゆんの大日輪寒氷かんひようを消滅するがごとく、無量の草露そうろを大風たいふうの零落れいらくするがごとく、一言一時いちごんいちじに「未顕真實みけんじつ」と打うちけし、大風たいふうの黒雲こくうんをまき、大虚たいこに満月の処しよするがごとく、青天に日輪にちりんの懸かり給たまうがごとく、「世尊は法久しうして後、要かならずまさに眞実を説くべし」と照てらせ給たまいて、華光如来・光明如来等と舍利弗・迦葉等を赫々かくかくたる日輪、明々めいめいたる月輪がつりんのごとく、鳳文ほうもんにしるし龜鏡ききように浮うかべられて候へばこそ、如来滅後の人天にんでんの諸檀那等には仏陀のごとくは仰あおがれ給たまいしか。

水すまば月影ををしむべからず。風ふかば草木そうもくなびかざるべしや。法華經の行者あるならば、これらの聖者は大火だいかの中をすぎても、大石だいせきの中をとをりても、とぶらはせ給たまうべし。迦葉かじようの入定にゅうじようもことにこそよれ。いかにとなりぬるぞ。いぶかしも申すばかりなし。

「後五百歳」のあたらざるか。「広宣流布」の妄語となるべきか。日蓮が法華經の行者ならざるか。法華經を教内と下して別伝と称する大妄語の者をまほり給うべきか。捨閉閣抛と定て、法華經の門をとちよ巻をなげすてよとゑりつ（彫付）けて、法華堂を失える者を守護し給うべきか。仏前の誓はありしかども、濁世の大難のはげしさをみて諸天下り給わざるか。日月天にまします。須弥山いまもくづれず。海潮も増減す。四季もかたのごとくたがはず。いかになりぬるやらんと大疑いよいよつもり候。また諸大菩薩・天人等のごときは爾前の経々にして記莚をうるやうなれども、水中の月を取らんとするがごとく、影を体とおもוגがごとく、いろかたちのみあて実義もなし。また仏の御恩も深くて深からず。

世尊初成道の時はいまだ説教もなかりしに、法慧菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛蔵菩薩等など申せし六十余の大菩薩。十方の諸仏の国土より教主釈尊の御前に来り給いて、賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請にをもむいて十住・十行・十回向・十地等の法

門を説き給いき。これらの大菩薩の所説の法門は釈尊に習いたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も来て法をとく。また釈尊にならいたてまつらず。総じて華嚴会座の大菩薩・天竜等は釈尊已前に不思議解脱に住せる大菩薩なり。釈尊の過去因位の御弟子にやあるらん。十方世界の先仏の御弟子にやあるらん。一代教主始成正覺の仏の弟子にはあらず。

阿含・方等・般若の時、四教を仏の説き給いし時こそやうやく(漸)御弟子は出来して候へ。これもまた仏の自説なれども正説にはあらず。ゆへいかなとなれば、方等・般若の別円二教は華嚴經の別円二教の義趣をいはず。彼の別円二教は教主釈尊の別円二教にはあらず。法慧等の大菩薩の別円二教なり。これらの大菩薩は人目には仏の御弟子かとは見ゆれども、仏の御師ともいぬべし。世尊彼の菩薩の所説を聴聞して智發して後、重て方等・般若の別円をとけり。色もかわらぬ華嚴經の別円二教なり。さればこれらの大菩薩は釈尊の師なり。華嚴經にこれらの菩薩をかすへて善知識ととかれしはこれなり。善知識

と申すは一向師いっしゅうしにもあらず、一向弟子にもあらずある事なり。藏通二教ぞうつうにぎょうはまた別円の枝流しりゅうなり。別円二教べつえんにぎょうをしる人必ず藏通二教ぞうつうにぎょうをしるべし。

人の師と申すは弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候うちなり。例せば仏より前の一切の人天にんてん・外道は二天・三仙の弟子なり。九十五種まで流派りゅうはしたりしかども三仙さんせんの見けんを出でず。教主釈尊しやくそんもかれに習ない伝たへて、外道の弟子にてましませしが、苦行くぎやう樂行らくぎやう十二年の時、苦・空・無常・無我の理をさとり出でてこそ、外道の弟子の名をば離れさせ給いて、無師智むしちとはなのらせ給いしか。また人天にんてんも大師おほとは仰おほぎまいらせしか。されば前四味の間は教主釈尊しやくそん、法慧菩薩ほうえいぼさつ等の御弟子おんしなり。例せば文殊もんじゆは釈尊九代の御師おんしと申すがごとし。つねは諸経しよけいに「不説一字ふせついちじ」ととかせ給うもこれなり。

仏御年七十二年ほとけおんとしの年、摩竭提国まがたこくり靈鷲山りやうじゆせんと申す山にして無量義経をとかせ給いしに、四十余年の経々をあげて枝葉をばその中におさめて、「四十余年末顕眞実」と打ち消し給うはこれなり。この時こそ諸大菩薩・諸天人等はあはてて実義じつぎを請しんせんとは申せしか。無量義

經にて実義とをばしき事一言ありしかども、いまだまことなし。たとへば月の出んとして
 その体東山にかくれて、光り西山に及べども、諸人月体を見ざるがごとし。

法華經方便品の略開三顯一の時、仏略して一念三千心中の本懐を宣べ給う。始の事な
 れば、ほととぎすの音をねをびれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半を出でた
 れども薄雲のをほへるがごとくかそかなりしを、舍利弗等驚て諸天竜神・大菩薩等をも
 よをして、「諸の天竜神等その数恒沙のごとし、仏を求むる諸の菩薩大数八万あり。ま
 た諸の万億国の転輪聖王の至れる、合掌して敬心を以て具足の道を聞きたてまつらんと
 欲す」等とは請せしなり。文の心は四味三教、四十余年の間いまだきかざる法門うけ給
 はらんと請せしなり。

この文に「欲聞具足道」と申すは、大經に云く「薩とは具足の義に名づく」等云云。無
 依無得大乘四論玄義記に云く「沙とは決して六と云う。胡法には六を以て具足の義とな
 すなり」等云云。吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足となす」等云云。天台の玄義の八に

云く「薩とは梵語、ここに妙と翻ず」等云云。付法蔵の第十三真言華嚴諸宗の元祖、本地

は法雲自在王如来、迹に竜猛菩薩、初地の大聖の大智度論千卷の肝心に云く「薩とは

六也」等云云。妙法蓮華經と申すは漢語なり。月支には薩達磨分陀利迦蘇多攬と申す。善

無畏三蔵の法華經の肝心真言に云く、「曩謨三曼陀 普仏陀 唵 三身如来 阿阿暗悪 開

示悟入 薩縛勃陀枳攬 知 娑乞鞠毗耶 見 譏譏曩婆縛 如虚空性 羅乞叉爾 離塵相

なり 薩哩達磨 正法なり 浮陀哩迦 白蓮華 蘇駄覽 経 惹 入 吽 遍 鑠 作 発

歡喜 縛白羅 堅固 羅乞叉鈴 擁護 吽 空無相無願 娑婆訶 決定成就。「この

真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり。この真言の中に薩哩達磨と申すは

正法なり。薩と申すは正なり。正は妙なり。妙は正なり。正法華・妙法華これなり。

また妙法蓮華經の上に南無の二字をけり。南無妙法蓮華經これなり。

妙とは具足。六とは六度万行。諸の菩薩の六度万行を具足するやうをきかんとをもう。具

とは十界互具。足と申すは一界に十界あれば当位に余界あり。満足の義なり。この經一部

・八卷・二十八品・六万九千三百八十四字、一々にみな妙の一字を備えて、三十二相八十種好の仏陀なり。十界にみな己界の仏界を顕す。妙樂云く「なお仏果を具す、余果もまたしかり」等云云。

仏これを答て云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云。衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闍提、衆生と申すは九法界。衆生無辺誓願度ここに満足す。「我本誓願を立つ。一切の衆生をして我がごとく等しくして異なること無からしめんと欲す。我が昔の願せしところのごとき、今は已に満足しぬ」等云云。諸大菩薩諸天等この法門をきひて領解して云く「我等昔より来、数世尊の説を聞けどもいまだ曾てかくのごとき深妙の上法を聞かず」等云云。伝教大師云く「我等昔より来、数世尊の説を聞くとは、昔、法華經の前に華嚴等の大法を説くを聞けるを謂うなり。いまだ曾てかくのごとき深妙の上法を聞かずとは、法華經の唯一仏乗の教えをいまだ聞かずと謂うなり」等云云。華嚴・方等・般若・深密・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經は、いまだ一代の肝心たる一念三千の

大綱骨髄たる二乗作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解せり。

また今よりこそ諸大菩薩も梵・帝・日月・四天等も教主釈尊の御弟子にては候へ。されば宝塔品には、これらの大菩薩を仏我が御弟子等とをばすゆへに諫曉して云く「諸のだいしゆ大衆に告ぐ、我が滅度の後、誰か能くこの経を護持し誦誦する。今仏前において自ら誓言を説け」とは、したたかに仰せ下せしか。また諸大菩薩も「譬えば大風のたいふう小樹の枝を吹くがごとし」等と、吉祥草のきつじやうそう大風にしたが随い、河水のたいがい大海へ引くがごとく、仏には随いまいらせしか。しかれども霊山山日浅くして夢のごとく、うつゝならずありしに、証前のさへいりやう宝塔の上に起後のきご宝塔あて、十方の諸仏来集せる、みな我が分身なりとなのらせ給い、宝塔は虚空に、釈迦・多宝坐を並べ、日月の青天に並出せるがごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、宝樹の下の師子のゆかにまします。

華嚴經の蓮華蔵世界は、十方・此土の報仏、各々に国々にして、彼界の仏、この土に来て分身となのらず。この界の仏、彼の界へゆかず。ただ法慧等の大菩薩のみ互いに来会せ

り。大日經・金剛頂經等の八葉九尊三十七尊等、大日如來の化身とわみゆれども、その化身、三身円滿の古仏にあらず。大品經の千仏・阿彌陀經の六方の諸仏、いまだ來集の仏にあらず。大集經の來集の仏、また分身ならず。金光明經の四方の四仏は化身なり。総て一切經の中に各修各行の三身円滿の諸仏を集めて、我分身とわとかれず。

これ寿命品の遠序なり。始成四十余年の釈尊、一劫十劫等已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣にもにず、をびただしくをどろかし。また始成の仏ならば所化十方に充滿すべからざれば、分身の徳は備わりたりとも示現してゑきなし。天台云く「分身すに多し、まさに知るべし成仏の久しきことを」等云云。大会のをどろきし意をかゝれたり。

その上に地涌千界の大菩薩大地より出來せり。釈尊に第一の御弟子とをほしき普賢・文殊等にもにるべくもなし。華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、この菩薩に對当すれば彌猴の群中に帝釈の來

り給うがごとし。山人に月卿等のまじられるにことならず。補処の弥勒すらな迷惑せり。いかにいわんや、その已下をや。この千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします。いわゆる上行・無辺行・淨行・安立行なり。この四人は虚空・靈山の諸大菩薩等、眼もあはせ心もをよばず。華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等も、この菩薩に対すれば翳眼のものゝ日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向いたてまつるがごとし。大公等の四聖の衆中にあつしににたり。商山の四皓が惠帝に仕えしにことならず。巍巍堂々として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。

弥勒菩薩心に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道、今の靈山まで四十二年が間、この界の菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩、みなしりたり。また十方の淨穢土に或は御使い、或いは我と遊戯して、その国々に大菩薩を見聞せり。この大菩薩の御師なんどはいかなる仏にてやあるらん。よもこの釈迦・多宝・十方の分身の仏陀にはにるべく

もなき仏にてこそをはすらめ。雨の猛たげきを見て竜の大なる事をしり、華の大なるを見て池のふかきことはしんぬべし。これらの大菩薩の来きたる国、また誰たれと申す仏にあいたてまつり、いかなる大法だいほうをか習しゆ修しゆし給たまうらんと疑うわし。あまりの不審ふしんさに音こえをもいだすべくもなけれども、仏力ぶつりきにやありけん、弥勒菩薩みろくぼつ疑うたがつて云く、「無量千万億の大衆だいうしゆの諸の菩薩は、昔より未いまだ曾て見ざるところなり。この諸の大威徳の精進しやうじんの菩薩衆しゆは、誰たれかそのために法を説いて、教化きやうけして成就じゆうじゆせる。誰に従つて初めて発心ほつしんし、何れの仏法ぶつぽうをか称揚しやうやうせる。世尊せそん、我昔われむかしより来このかた未だ曾てこの事じを見ず。願ねがわくはその所従の国土の名号を説きたまへ。我常に諸国に遊べども、未だ曾てこの事を見ず。我この衆しゆの中において、乃いまし一人いちにんをも識しらす。忽然こつぜんに地ちより出でたり。願ねがわくはその因縁を説きたまえ」等云云。天台云く「寂場じやくじやうより已降いこう、今座こんざより已往いおう、十方じつぱうの大士だいじ、来会らいえ絶えず、限るべからずといえども、我補処ふしよの智力ちりきを以て悉く見、悉く知る。しかれどもこの衆しゆにおいて、一人をも識しらす。しかるに我十方じつぱうに遊戯ゆげして諸仏しよぶつに觀奉くわんぶうし、大衆だいうしゆに快こほく識知しきちせらる」等云云。妙楽

云く「智人は起を知る。蛇は自ら蛇を識る」等云云。経釈の心分明なり。詮するところは、初成道よりこのかた、此土・十方にてこれらの菩薩を見たてまつらずきかず、と申すなり。

仏この疑いに答て云く「阿逸多 汝等昔よりいまだ見ざるところの者は、我この娑婆世界において阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、この諸の菩薩を教化し示導して、その心を調伏して、道の意を發さしめたり」等。また云く「我伽耶城菩提樹下において坐して最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、爾してすなわちこれを教化して、初めて道心を發さしむ。今皆不退に住せり。乃至、我久遠より来、これらの衆を教化せり」等云云。ここに弥勒等の大菩薩大に疑をもつ。華嚴經の時、法慧等の無量の大菩薩あつまる。いかなる人々なるらんとをもへば、我が善知識なりとをほせられしかば、さもやとうちをもひき。その後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩もしかのごとし。この大菩薩は彼等にはなるべくもなきふりたりげにまします。定て釈尊の御師匠かなんどおぼし

きを、「初めて道心を発さしむ」とて幼稚のものどもなりしを教化して弟子となせり、な
 んどをほせあれば大なる疑なるべし。

日本の聖徳太子は人王第三十二代用明天皇の御子なり。御年六歳の時百濟・高麗・唐土よ
 り老人どものわたりしを、六歳の太子我弟子なりとをほせありしかば、彼老人どもまた合
 掌して我師なり等云云。不思議なりし事なり。外典に申す、或者道をゆけば、路のほとり
 に年三十ばかりなるわかものが八十ばかりなる老人をとらへて打けり。いかなる事ぞと
 えば、この老翁は我子なりなど申すとかたるにもにたり。

されば弥勒菩薩等疑て云く、「世尊、如来太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去
 ること遠からず。道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。これ
 より已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊云何ぞこの少時において大いに仏事を作し
 たまえる」等云云。一切の菩薩始め華嚴経より四十余年会々に疑をまうけて、一切衆生
 の疑網をはらす。中にこの疑第一の疑なるべし。無量義経の大莊嚴等の八万の大士、四

十余年と今との歴劫・疾成の疑にも超過せり。觀無量寿經に韋提希夫人の子阿闍世王、
 提婆にすかされて父の王をいましめ（禁錮）母を殺さんとせしが、耆婆・月光にをどされ
 て母をはなちたりし時、仏を請したてまつて、まづ第一の問に云く「我宿何の罪ありてこ
 の悪子を生む。世尊、また何等の因縁あつて、提婆達多と共に眷屬となりたもう」等云云。
 この疑の中に「世尊また何等の因縁あつて」等の疑は大なる大事なり。輪王は敵と共に生
 れず。帝釈は鬼ともならず。仏は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共にはまします。還
 て仏にはましまさざるかと疑うなるべし。しかれども仏答え給わず。されば觀經を讀誦
 せん人、法華經の提婆品へ入らずばいたづらごととなるべし。大涅槃經に迦葉菩薩の三十六
 の問もこれには及ばず。されば仏この疑を晴させ給はずば一代の聖教は泡沫にどうじ、
 一切衆生は疑網にかゝるべし。寿量の一品の大切なるこれなり。
 その後、佛壽量品を説て云く、「一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釈迦牟尼仏は、釈
 氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまえ

りと謂えり」等云云。この経文は始め寂滅道場より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。「しかるに善男子、我実に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由佗劫なり」等云云。この文は華嚴經の三処の「始成正覺」、阿含經に云く、「初成」、淨名經の「始坐仏樹」、大集經に云く、「始十六年」、大日經の「我昔坐道場」等、仁王經の「二十九年」、無量義經の「我先道場」、法華經の方便品に云く、「我始坐道場」等を、一言に大虚妄なりとやぶるもん（文）なり。

この過去常顯るる時、諸仏みな釈尊の分身なり。爾前迹門の時は諸仏釈尊に肩を並べて各修各行の仏なり。かるがゆへに諸仏を本尊とする者釈尊等を下す。今華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏はみな釈尊の眷屬なり。仏三十成道の御時は大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界を奪い取り給いき。今、爾前、迹門にして十方を淨土とがう（号）して、この土を穢土ととかれしを打かへして、この土は本土となり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。

仏は久遠の仏なれば迹化・他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。一切経の中に、この
 寿量品ましまさずば、天に日月無く、国に大王なく、山河に珠なく、人に神のなからん
 がごとくしてあるべきを、華嚴・真言等の権宗の智者とをぼしき澄観・嘉祥・慈恩・弘
 法等の一往権宗の人々、かつは自の依経を讚歎せんために、或は云く、華嚴経の教主
 は報身、法華経は応身と、或は云く、法華寿量品の仏は無明の辺域、大日経の仏は明の
 分位等云云。

雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讒せば黄石も玉とみへ、諛臣も賢人かとをぼゆ。
 今濁世の学者等、彼等の讒義に隠されて寿量品の玉を翫ばず。また天台宗の人々もた
 ぼらかされて金石一同のをもひをなせる人々もあり。仏久成にましまさずば所化の少か
 るべき事を弁うべきなり。月は影を慳ざれども水なくばうつるべからず。仏衆生を化せ
 んとをぼせども結縁うすければ八相を現ぜず。例せば諸の声聞が初地・初住にはのぼれ
 ども、爾前にして自調自度なりしかば、未来の八相を(一期)するなるべし。

しかれば教主釈尊始成しじょうならば、今この世界の梵帝・日月・四天等は劫初こつしよよりこの土を領すれども、四十余年の仏弟子なり。靈山八年りやうぜんの法華結縁けちえんの衆しゆ今まいりの主君にをもひつかず、久住くじゆうの者にへだてらるゝがごとし。今、久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・月光がつこう、西方阿弥陀如来の觀音・勢至、乃至十方世界の諸仏の御弟子、大日・金剛頂等の兩部の大日如来の御弟子の諸大菩薩、なお教主釈尊の御弟子なり。諸仏、釈迦如来の分身ふんじんたる上は諸仏しよふの所化申すにをよばず。いかにいわんやこの土の劫初こつしよよりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊の御弟子にあらずや。

しかるを天台宗より外ほかの諸宗は本尊にまどえり。俱舍・成実・律宗は三十四心断結成道だんけつじじょうどうの釈尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我身わがみは民の子とをもうがごとし。華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり。法相・三論は勝応身しょうおうみににたる仏を本尊とす。大王の太子、我が父は侍むすひとをもうがごとし。華嚴宗・真言宗は釈尊を下さげて盧舎那るしやな・大日等を本尊と定さだむ。天子たる父を下くだして、種姓しゆしやうもなき者の法王のごとくなるにつけ

り。浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをも(思)て、教主をすてたり。禅宗は下賤
 の者いちばん一分の徳あて父母をさぐるがごとし。仏をさげ経を下す。これみな本尊ほんぞんに迷えり。例
 せば三皇已前に父をしらず、人みな禽獸に同ぜしがごとし。寿量品をしらざる諸宗の者は
 畜ちくに同じ。不知恩の者なり。故に妙楽云く、「一代教いちだいきょうの中うち、いまだ曾て父母の寿じゆの遠おんを顯
 わさず。もし父の寿の遠きを知らざれば、また父統ふとうの邦くにに迷いなん。いたずらに才能と謂
 うとも全く人の子にあらず」等云云。妙楽大師は唐すえの末天寶年中の者なり。三論・華嚴・
 法相・真言等の諸宗、並に依經えきやうを深くみ、広く勸かんがえて、寿量品の仏をしらざる者は父統
 の邦くにに迷える才能ある畜生とかけるなり。「いたずらに才能と謂うとも」とは華嚴宗の法
 蔵・澄觀、乃至真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師にんしなれども、子の父をしらざるがごとし。
 伝教大師は日本顯密の元祖、秀句に云く、「他宗所依しよえの經は一分父母の義ありといえども、
 しかれどもただ愛のみあつて蔵げんの義かを闕かく。天台法華宗は蔵げん・愛あいの義を具す。一切の賢けん
 聖しやう、学無学、及び菩提心を發おこせる者の父なり」等云云。

真言・華嚴等の経経には種・熟・脱の三義、名字すらなおなし。いかにいわんや、その義をや。華嚴・真言経等の一生初地の即身成仏等は経は権経にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし。宗々互に権を諍う。予これをあらそわず。ただ経に任すべし。法華経の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり。天台の一念三千これなり。華嚴経乃至諸大乘経・大日経等の諸尊の種子みな一念三千なり。天台智者大師一人この法門を得給えり。

華嚴宗の澄観、この義を盗んで華嚴経の「心如工画師」の文の神とす。真言大日経等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。善無畏三蔵が震旦に来て後、天台の止観を見て智発し、大日経の「心実相」「我一切本初」の文の神に天台の一念三千を盗み入れて真言宗の肝心として、その上に印と真言とをかざり、法華経と大日経との勝劣を判ずる時、理同事勝の釈をつくれり。両界の漫荼羅の二乗作仏・十界互具は一定大日経にありや。第一の誑惑なり。故に伝教大師云く、「新来の真言家は則ち筆受の相承を泯し、

旧く到とうの華くわ嚴えん家は則すなはち影えい響きやうの軌き模ぼを隠かくす」等云云。俘ふ囚しゆうの嶋じまなどにわたで、「ほのど」というた（和歌）「わ、われよみたりなど申すは、えぞてい（夷体）の者はさこそとをもつべし。漢土・日本の学者またかくのごとし。

良りやう諳しやん和わ尚じやう云く「真言・禅門・華嚴・三論、乃至、もし法華等に望めばこれ接引門」等云云。善無畏三蔵の閻魔の責せめにあづからせ給いしはこの邪見による。後のちに心をひるがへし、法華經に歸伏きぶくしてこそこのせめをば脱のがれさせ給いしか。その後、善無畏・不空等、法華經を両界の中央にきて大王のごとくし、胎藏の大日經・金剛頂經をば左右の臣下のごとくせしこれなり。日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて法華經をば第八にをきしかども、事相の時、實慧じちえ・真雅しんが・円澄えんちやう・光定等の人々に伝え給いし時、両界の中央に上かみのごとくをかれたり。例せば三論の嘉祥かじやうは法華玄十卷に法華經を第四時會二破二と定むれども、天台に歸伏して七年つかへ「廢講散衆はいこうさんしゆう身しん為い肉に橋きやう」となせり。法相の慈恩ほつおんは法苑義林ぎりん七卷十二卷に「一乘方便・三乘真實」等の妄言もうげん多し。しかれども玄贊げんざんの第四には「故亦こやく兩

存^{そん}」等と我宗^{わがしゆう}を不定^{ふじやう}になせり。言^{ことば}は両方なれども心は天台に帰伏せり。華嚴の澄觀は華嚴の疏^{しよ}を造^{つくつ}て、華嚴・法華相對して法華を方便とかけるに似^{にたれ}ども、「彼の宗^かこれを以て実となす。この宗の立義^{りつぎ}理として通ぜざることなし」等とかけるは悔還^{くいかえ}すにあらずや。弘法もまたかくのごとし。龜鏡^{ききやう}なければ我が面^{おもて}をみず。敵^{かたき}なければ我が非をしらず。真言等の諸宗の学者等我が非をしらざりし程に、伝教大師にあひたてまつて自宗^{じゆう}の失^{たが}をしるなるべし。されば諸經の諸仏・菩薩・人天^{にんでん}等は彼々^{かれがれ}の經々にして仏^{ほとけ}にならせ給うやうなれども、実には法華經にして正覺^{しやうがく}なり給へり。釈迦・諸仏の衆生無辺の総願は皆この經にをいて満足す。「今は已^{すで}に満足しぬ」の文^{もん}これなり。予事^{よじ}の由^{よし}ををしはかるに、華嚴・觀經・大日經等をよみ修行する人をばその經々の仏・菩薩・天等守護し給うらん。疑いあるべからず。ただし大日經・觀經等をよむ行者等、法華經の行者に敵對をなさば、彼の行者をすて、法華經の行者を守護すべし。例せば孝子、慈父の王敵となれば父をすてて王にまいる。孝^{いた}の至^{いた}りなり。仏法もまたかくのごとし。法華

經の諸仏・菩薩・十羅刹じゆうらせつ、日蓮を守護し給う上、浄土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊・守護の善神ぜんじん、日蓮を守護し給うべし。例せば七宗の守護神が伝教大師をまほり給たましがごとしとをもう。

日蓮案じて云く、法華經の二処三会の座にまし／＼し日月等の諸天は、法華經の行者出来せば、磁石の鉄を吸すうがごとく、月の水に遷うつるがごとく、須臾しゆゆに来て行者に代り、仏前の御誓おんちかいをはたさせ給うべしとこそをばへ候うけに、いままで日蓮をとぶらひ（訪）給わぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか。されば重かさねて經文を勸かんえて我身わがみにあてゝ身の失とがをしるべし。

疑うたがつて云く、当世の念仏宗・禅宗等をば、何なる智眼ちげんをもつて法華經の敵人てきにん、一切衆生の悪知識とはしるべきや。答こたえて云く、私わたくしの言ことばを出いすべからず。經釈きやうしやくの明鏡めいきやうを出いして謗法の醜面しゆめんをうかべ、その失とがをみせしめん。生盲うじやうめくは力をよばず。法華經の第四宝塔品に云く「爾の時に多宝仏、宝塔うたうの中において半座を分ちて釈迦牟尼仏に与えたもう。爾の

時に大衆、二如来の七宝の塔の中の師子の座の上に在して、結跏趺坐したもうを見たてまつる。大音声を以て普く四衆に告わく、誰か能くこの娑婆国土において広く妙法華経を説かん。今正しくこれ時なり。如来久しからずしてまさに涅槃に入るべし。仏この妙法華経を以て、付嘱してあることあらしめんと欲す」等云云。第一の敕宣なり。

また云く「爾の時に世尊重ねてこの義を宣べんと欲して偈を説いて言わく、聖主世尊、久しく滅度すといえども、宝塔の中に在して、なお法のために来りたまえり。諸人云何ぞ勤めて法に為ざる。また我が分身の無量の諸仏恒沙等のごとく来れる、法を聴かんと欲す。各妙土及び弟子衆・天人・竜神、諸の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり。譬えば大風の小樹の枝を吹くがごとし、この方便を以て、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に誰か能くこの経を護持し誦誦せん。今仏前において、自ら誓言を説け」。第二の鳳詔なり。

「多宝如来、および我が身集むるところの化仏まさにこの意を知るべし。諸の善男子

各諦おののおのまじりかに思惟しゆいせよ。これは為これ難事なんじなり。宜よろしく大願だいがんを發おこすべし。諸余しよよの經典きやうてん、數恒かずごうじや沙の無む数の仏土ぶつどに擲なげ置おかんも、またいまだ為これ難かたしとせず。もし仏ほとけの滅後めくせ、惡世あくなの中なかにおいて、能よくこの經きやうを説とかん、これ則すなはち難かたしとす。仮使たとひ劫燒ごうしやうに乾かわきたる草くさを担にない負おうて、中ちゆうに入いつて燒やけざらんもまたいまだ難かたしとせず。我が滅度めくどの後に、もしこの經きやうを持たもつて、一人ひとりのためにも説とかん。これ即すなはち難かたしとす。諸しよの善男子ぜんなんし、我が滅後めくごにおいて、誰たれか能よくこの經きやうを護持ごぢし読誦よくどくせん。今いま仏前ぶつぜんにおいて、自ら誓言せいごんを説とけ」等ら云いふ。第三だいさんの諫勅かんちよくなり。第四だいじゆ・第五だいごの二箇にかの諫曉かんせう、提婆品ていばひんにあり、下しもにかく(書か)べし。

この經文きやうもんの心こころは眼前がんぜんなり。青天せいぜんに大日輪だいじつりんの懸かかれるがごとし。白面はくめんに壓墨おさくのあるあるににたり。しかれども生盲せいめうの者ものと邪眼じやげんの者ものと一眼いちげんのものものと各謂かくい自師じしの者もの・辺執家へんしつかの者ものはみがたし。万まん難なんをすて、道心だうしんあらん者ものにしるしとどめてみ(見み)せん。西王母せいおうぼがその(園えん)のものと(桃とう)、輪王出世りんのおうしゆっせの優曇華うとうんげよりもあいがたく、沛公はいこうが高羽こううと八年漢土はちねんかんちをあらそいし、賴朝らいぢゆうと宗盛むねもり

が七年秋津嶋にたゝかひし、修羅と帝釈と金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも、これには
 すぐべからずとするべし。日本国にこの法顕あらわるること二度なり。伝教大師と日蓮となり
 としれ。無眼むげんのものは疑うべし。力及ぶべからず。この経文は日本・漢土・月氏・竜宮・
 天上・十方世界の一切経の勝劣を釈迦・多宝・十方の仏来集して定め給うなるべし。
 問て云く、華嚴經・方等經・般若經・深密經・楞伽經・大日經・涅槃經等は九易くいちの内か、
 六難の内か。答て云く、華嚴宗の杜順とじゆん・智儼ちげん・法蔵ほうぞう・澄觀ちよつかん等の三蔵大師読で云く、華
 嚴經と法華經と六難うぢの内、名は二經なれども所説乃至理これ同じ。「四門しもん觀別、真諦を見
 ること同じ」のごとし。法相の玄奘三蔵・慈恩大師等読で云く、深密經と法華經とは同おなじ
 く唯識の法門にして第三時の教、六難うぢの内なり。三論の吉蔵等読で云く、般若經と法華經
 とは名異なみ体同たいどう、二經にきやう一法いつぽうなり。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等読で云く、大日經
 と法華經とは理同、をなじく六難の内のの經なり。日本の弘法読で云く、大日經は六難九易
 の内のにあらず。大日經は釈迦所説の一切経の外ほか、法身ほつしん大日如来の所説なり。またある人云

く、華嚴経は報身如来の所説、六難九易の内にはあらず。この四宗の元祖等かやうに読みければ、その流をくむ数千の学徒等もまたこの見をいでず。

日蓮なげいて云く、上の諸人の義を左右なく非なりといわば当世の諸人面を向べからず。

非に非をかさね、結句は国王に譏奏して命に及ぶべし。ただし我等が慈父、双林最後の

御遺言に云く、「法に依つて人に依らざれ」等云云。「人に依らざれ」等とは、初依・二依

・三依・第四依。普賢・文殊等の等覚の菩薩が法門を説き給うとも経を手ににぎらざらん

をば用べからず。「了義経に依つて不了義経に依らざれ」と定めて、経の中にも了義

・不了義経を糺明して信受すべきこそ候いぬれ。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云く、「修多

羅黒論に依らずして、修多羅白論に依れ」等云云。天台大師云く、「修多羅と合つ者は録

してこれを用い、文なく義なきは信受すべからず」等云云。伝教大師云く、「仏説に依憑

して口伝を信ずることなかれ」等云云。円珍智証大師云く、「文に依つて伝うべし」等云云。上

にあぐるところの諸師の釈、みな一分々々経論に依て勝劣を弁うやうなれども、みな自

宗を堅く信受し先師の謬義をたださざるゆへに、曲会私情の勝劣なり。莊嚴己義の法門なり。仏滅後の犢子・方広、後漢已後の外典は仏法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも、邪見強盛なり。邪法巧なり。華嚴・法相・真言等の人師、天台宗の正義を嫉ゆへに、「実經の文を会して権義に順ぜしむること」強盛なり。しかれども道心あらん人、偏党をすて、自他宗をあらそはず、人をあなづる事なかれ。

法華經に云く「已今当」等云云。妙樂云く「縦い經あつて諸經の王と云うとも、已今当説最為第一と云わず」等云云。また云く「已・今・当の妙、茲において固く迷う。謗法の罪苦長劫に流る」等云云。この經釈にをどろいて、一切經並に人師の疏釈を見るに、狐疑の氷とけぬ。今真言の愚者等、印・真言のあるをたのみて、真言宗は法華經にすぐれたりともをひ、慈覺大師等の真言勝れたりとをほせられぬれば、なんどももえるはいうにかいなき事なり。

密嚴經に云く「十地・華嚴經・大樹と神通・勝鬘及び余經と、皆この經より出でたり。

かくのごとき密嚴経は、一切経の中に勝れたり」等云云。

大雲経に云く「この経は即ちこれ諸経の転輪聖王なり。何を以ての故に。この經典の中に衆生の実性・仏性、常住の法蔵を宣説する故なり」等云云。

六波羅蜜経に云く「いわゆる過去無量の諸仏所説の正法及び我が今説くところの、いわゆる八万四千の諸の妙法蘊 撰して五分となす。一には索呾纜・二には毗那耶・三には阿毗達磨・四には般若波羅蜜・五には陀羅尼門となり。この五種の蔵をもて有情を教化す。もし彼の有情、契経・調伏・対法・般若を受持することあたわず。或はまた有情諸の悪業、四重・八重・五無間罪、方等経を謗する一闡提等の種々の重罪を造るに、銷滅して速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしむ。しかも彼がために諸の陀羅尼蔵を説く。この五の法蔵、譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙なる醍醐のごとし。総持門とは、譬えば醍醐のごとし。醍醐の味は乳・酪・蘇の中に微妙第一にして、能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。総持門とは、契経等の中に最も第一にして能

く重罪を除くと」等云云。

解深密經に云く、「爾の時に勝義生菩薩、また仏に白して言く、世尊初め一時において、波羅痾斯、仙人墮処施鹿林の中に在つて、唯声聞乘を發趣する者のために、四諦の相を以て正法輪を転じたまいき。これ甚だ奇、甚だこれ希有にして、一切世間の諸の天人等、先より能く法のごとく転ずる者あることなしといえども、しかも彼の時において転じたもるところの法輪は、有上なり、有容なり、これ未了義なり、これ諸の諍論安足の処所なり。世尊、在昔第二時の中に、ただ發趣して大乘を修する者のために一切の法は皆無自性なり、無生無滅なり、本来寂靜なり、自性涅槃なるに依り、隱密の相を以て正法輪を転じたまいき。更に甚だ奇にして、甚だ為れ希有なりといえども、しかも彼の時ににおいて転じたもるところの法輪、またこれ有上なり、容受するところあり、なおいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足の処所なり。世尊、今第三時の中において、普く一切乘を發趣する者のために、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして、無自性の

性なるに依り、顯了の相を以て正法輪を転じたもう。第一甚だ奇にして最もこれ希有なり。今に世尊轉じたもうところの法輪、無上無容にして、これ真の了義なり。諸の諍論安足の処所にあらず」等云云。

大般若經に云く「聽聞するところの世・出世の法に随つて、皆能く方便して般若甚深の理趣に会入し、諸の造作するところの世間の事業もまた般若を以て法性に会入し、一事として法性を出る者を見ず」等云云。

大日經第一に云く「秘密主、大乗行あり。無縁乗の心を発す。法に我性無し。何を以ての故に。彼の往昔かくのごとく修行せし者のごとくんば蘊の阿頼耶を觀察して、自性は幻のごとしと知る」等云云。また云く「秘密主、彼かくのごとく無我を捨て、心主自在にして、自心の本不生を覺す」等云云。また云く「いわゆる空性は根境を離れ、無相にして境界なく、諸の戲論に越えて、虚空に等同なり。乃至極無自性」等云云。また云く「大日尊、秘密主に告げて言く、秘密主、云何なるか菩提なる。謂く、実のごとく自心

を知る」等云云。

華嚴經に云く、「一切世間の諸の群生、声聞道を求めんと欲することあること少す。縁覺を求むる者、轉うたまた少なし。大乘を求むる者、甚はなだ希有なり。大乘を求むる者、なおこれ易く、能くこの法を信ずる、これ甚だかたし。いわんや能く受持し、正憶念しよおくねんし、説のごとく修行し、眞実に解げせんをや。もし三千大千界を以て頂戴すること一劫、身動かざらんも、彼の所作しよさいまだこれ難からず。この法を信ずるはこれ甚だ難かたし。大千塵数の衆生しゆじよの類に、一劫諸もろもろの樂具を供養するも、彼の功德いまだこれ勝すぐれず。この法を信ずるはこれ殊勝なり。もし掌たなこを以て十仏刹じゆふがつせつを持し、虛空中において住すること一劫なるも、彼の所作いまだこれ難かたからず。この法を信ずるはこれ甚だ難かたし。十仏刹塵の衆生の類に、一劫諸の樂具を供養せんも、彼の功德いまだ勝まされりとなさず。この法を信ずるはこれ殊勝しゆせつなり。十刹塵の数の諸の如来を、一劫恭敬くおんして供養せん。もし能くこの品ほんを受持せん者の功德 彼よりも最勝となす」等云云。

涅槃經に云く、「この諸の大乗方等經典は、また無量の功德を成就すといえども、この經に比せんと欲するに喩をなすを得ざること百倍・千倍・百万億、乃至算數譬喩も及ぶこと能わざるところなり。善男子、譬えば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり。もし服することある者は、衆病皆除き、所有の諸樂も悉くその中に入るがごとし。善男子、仏もまたかくのごとし。仏より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出し、なお醍醐のごとし。醍醐と言ふは仏性に喩う」等云云。

これらの經文を法華經の已今当・六難九易に相對すれば、月に星をならべ、九山に須弥を合せたるににたり。しかれども華嚴宗の澄觀、法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・弘法等の仏眼のごとくなる人なおこの文にまどへり。いかにいわんや盲眼のごとくなる当世の学者等、勝劣を弁うべしや。黑白のごとくあきらかに、須弥・芥子のごとくなる勝劣なを

まどへり。いはんや虚空のごとくなる理に迷わざるべしや。教の浅深をしらざれば理の浅
 深弁うものなし。巻をへだて文前後すれば、教門の色弁えがたければ、文を出して愚者
 を扶んとをもう。王に小王・大王、一切に少分・全分・五乳に全喩・分喩を弁うべし。
 六波羅蜜経は有情の成仏あて、無性の成仏なし。いかにいわんや久遠実成をあかさず。な
 お涅槃経の五味をよばず、いかにいわんや法華経の迹門・本門にたいすべしや。しかる
 に日本の弘法大師、この経文にまどひ給て、法華経を第四の熟蘇味に入れ給えり。第
 五の総持門の醍醐味すら涅槃経に及ばず、いかにし給けるやらん。しかるを「震旦人師
 争盗醍醐」と天台等を盗人とかき給へり。「惜哉古賢不啻醍醐」等と自歎せられたり。
 これらはさてをく。我が一門の者のためにしるす。他人は信ぜざれば逆縁なるべし。一諦
 をなめて大海のしを(潮)をしり、一華を見て春を推せよ。万里をわたて宋に入らずとも、
 三箇年を経て靈山にいたらずとも、竜樹のごとく竜宮に入らずとも、無著菩薩のごとく
 弥勒菩薩にあはずとも、二処三会に値わずとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。蛇

は七日が内の洪水をしる、竜の眷属なるゆへ。鳥は年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師
 なりしゆへ。鳥はとぶ徳、人にすぐれたり。日蓮は諸経の勝劣をしること、華嚴の澄觀・
 三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の弘法にすぐれたり。天台・伝教の跡をしあのぶゆへなり。
 彼人々は天台・伝教に帰せさせ給はずは謗法の失脱とがれさせ給うべしや。当世とうせい日本国に第一
 に富める者は日蓮なるべし。命いのちは法華經にたてまつる。名をば後代ごだいに留とどべし。大海だいかいの主
 となれば諸の河神かじん皆したがう。須弥山の王に諸の山神さんじんしたがわざるべしや。法華經の六難
 九易くわくまを弁わうれば一切経よまざるにしたがうべし。
 宝塔品の三箇さんかの勅宣ちくせんの上に提婆品に二箇にかの諫曉かんぎょうあり。提婆達多は一闡提てんのうなり、天王如来
 と記きせらる。涅槃經四十卷の現証はこの品ほんにあり。善星ぜんせい・阿闍世等の無量の五逆・謗法
 の者、一をあげ頭かしらをあげ、万ををさめ枝をしたがふ。一切の五逆・七逆・謗法・闡提、
 天王如来にあらはれおわんぬ。毒藥變じて甘呂かんろとなる。衆味しゅうみにすぐれたり。竜女りゅうにょが成仏
 これ一人いちにんにはあらず、一切の女人にょにんの成仏をあらわす。法華經已前の諸の小乗經には女人の

成仏をゆるさず。諸の大乗経には成仏往生をゆるすやうなれども、或は改転かいてんの成仏にして、

一念三千の成仏にあらざれば、有名無実うみやうむじつの成仏往生なり。拳一例諸こいちれいしよと申して、竜女が成
 仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。

儒家の孝養は今生こんじやうにかぎる。未来の父母を扶たすけざれば、外家げけの聖賢せいけんは有名無実うみやうむじつなり。外
 道は過か・未みをしれども父母を扶たすくる道なし。仏道こそ父母の後世ごせを扶たすくれば聖賢の名はあ
 るべけれ。しかれども法華経已前等の大小乗の経きやうしゆりう宗は自身の得道とくだうなおかなひがたし。い
 かにいわんや父母をや。ただ文もんのみありて義なし。今法華経の時こそ女人成仏の時、悲母ひも
 の成仏も顕あらわれ、達多だつたの悪人成仏の時慈父の成仏も顕あらわるれ。この経は内典ないでんの孝経なり。
 二箇にかのいさめおわんぬ。

已上五ヶの鳳詔ほうしうしやうにをどろきて、勸持品の弘経くきやうあり。明鏡の経きやうもん文を出いだして当世の禪・律
 ・念仏者、並に諸檀那の謗法をしらしめん。日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑ねうしの時に
 頸くびはねられぬ。これは魂魄こんぱく佐土さどの国にいたりて、返年かえるとしの二月雪中せつちゆうにしるして、有縁うえんの弟

子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みんないかにをぢずらむ。これは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。かたみともみるべし。

勸持品に云く「唯願くは慮つひしたもうべからず。仏滅度の後、恐怖くふ悪世あくせの中において、

我等まさに広く説くべし。諸もろの無智の人の悪口罵詈あつくめり等し、及び刀杖とうじょうを加うる者あらん。

我等皆まさに忍ぶべし。悪世あくせの中の比丘なかは、邪智じやちにして心諂曲てんじくに、いまだ得ざるをこれ得

たりと謂おもい、我慢がまんの心充滿せん。或あるは阿練若あれんにやに、納衣のうえにして空閑くうげんに在つて、自ら真みずかの道どう

を行おつて、人間にんげんを輕賤きやうせんする者あらん。利養とんじやくに貪著とんじやくするが故に、白衣びやくえのために法

を説いいて、世に恭敬ききやうせらるることをうるごと、六通ろくつうの羅漢らかんのごとくならん。この人悪心

を懷いだき、常に世俗じよの事ことを念おもい、名を阿練若あれんにやに仮かりて、好んで我等われらが過とがを出いさん。常に大衆だいしゆ

の中に在つて、我等われらを毀そしらんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆しゆ

に向かつて、誹謗ひぼうして我が悪を説いいて、これ邪見の人、外道の論議を説くと謂わん。

濁劫じやく悪世あくせの中には、多く諸もろの恐怖くふあらん。悪鬼あくきその身みに入つて、我を罵詈めりき毀辱きにくせん。

濁世じやくせの悪比丘あくびくは、仏ほとけの方便ほうべん・随宜ずいぎ所説しよせつの法ほふを知らず、悪口あくぐちして鬻ひんじやく鬻ひんじやくし、数数しばしば擯出ひんしゆいせられん」等云云。

記の八に云く、「文もんに三、初はじめに一行いちぎやうは通じて邪人じやにんを明あかす。即ち俗衆ぞくしゆなり。次ついでで一行いちぎやうは道門だうもん増上慢しやうじやうまんの者を明あかす。三に七行しちぎやうは僭聖せんしやう増上慢しやうじやうまんの者を明あかす。この三の中に初はじめは忍しのぶべし。次ついでは前に過まへぎたり。第三だいさん最も甚はなはだし。後後ごごの者は転うたた識しり難がたきを以もつての故ゆゑに」等云云。東春とうしゆんに智度法師ちどほふし云く、「初はじめに有諸うしよより下したの五行ごぎやうは、第一いちだいいちに一偈いちげは三業さんごうの悪あくを忍しのぶぶ。これ外げ悪あくの人にんなり。次に悪世あくせの下したの一偈いちげは、これ上慢じやうまん出家しゆたの人にんなり。第三だいさんに或有わくう阿練あれん若にやより下したの三偈さんげは、即ちこれ出家しゆたの処ところに一切いっけつの悪人あくにんを撰せんす」等云云。また云く、「常在だいにしゆちゆう大衆だうしゆ中ちゆうより下したの兩行りやうぎやうは、公処こうしよに向かつて法ほふを毀こり人にんを謗ぼうす」等云云。

涅槃經ねはんぎやうの九くに云く、「善男子ぜんなんし、一闍提いちぢていあり、羅漢らかんの像がたを作なして空くう処しよに住すまひ、方等ほうとう大乘だいじやう經典きやうべんを誹謗ひぼうせん。諸しよの凡夫ぼんぷの人見にんけん已おひつて、皆真みなまことの阿羅漢あらかん、これ大菩薩だいぼさつなりと謂いわわん」等云云。また云く、「爾なんの時にこの經ぎやう、閻浮提えんぶだいにおいてまさに広く流布りゆうぷすべし。この時ときまさに諸しよ

の悪比丘あつてこの経を抄略め、分ちて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし。
 この諸の悪人、またかくのごとき經典を誦誦すといえども、如来深密の要義を滅除して、
 世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す。前を抄して後に著け、後を抄して前に著け、前後
 を中に著け、中を前後に著く。まさに知るべし、かくのごときの諸の悪比丘はこれ魔の伴
 侶なり」等云云。六卷の般泥洹經に云く、「阿羅漢に似たる一闍提あつて悪業を行ず。一
 闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提ありとは、この諸の衆生、
 方等を誹謗せるなり。一闍提に似たる阿羅漢とは声聞を毀皆し、広く方等を説くなり。衆
 生に語て言く、我れ汝等と俱にこれ菩薩なり、所以は何ん、一切皆如来の性ある故にと。
 しかも彼の衆生、一闍提なりと謂わん」等云云。また云く「我れ涅槃の後、乃至正法滅し
 て後、像法の中においてまさに比丘あるべし。持律に似像して少かに経を誦誦し、飲食を
 貪嗜し、その身を長養す。袈裟を服すといえどもなお獵師の細めに視て徐に行くが
 ごどく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、我れ羅漢を得たりと。外には

賢善を現し、内には貪嫉を懷かん。瘡法を受けたる婆羅門等のごとし。実に沙門にあら
ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

それ鷲峰・双林の日月、毗湛・東春の明鏡に当世の諸宗並に国中の禅・律・念佛者が
醜面を浮べたるに一分もくもりなし。妙法華經に云く、「於仏滅度後恐怖惡世中」。安樂

行品に云く、「於後惡世」。また云く、「於末世中」。また云く、「於後末世法欲滅時」。分別

功德品に云く、「惡世末法時」。藥王品に云く、「後五百歲」等云云。正法華經勸說品に云く
「然後末世」。また云く、「然後來末世」等云云。添品法華經に云く、等。天台の云く、「像法

の中の南三北七は法華經の怨敵なり」。傳教の云く、「像法の末、南都六宗の学者は法華の

怨敵なり」等云云。彼等の時はいまだ分明ならず。これは教主釈尊・多宝仏、宝塔の中
に日月の並ぶがごとく、十方分身の諸仏樹下に星を列ねたりし中にして、正法一千年・像

法一千年、二千年すぎて末法の始に、法華經の怨敵三類あるべしと、八十万億那由他の
諸菩薩の定め給いし、虚妄となるべしや。

当世とうせいは如来滅後二千二百余年なり。大地たいちは指さばはづるとも、春は花さかずとも、三類さんるいの敵人てきにん必ず日本国にあるべし。さるにてはたれたれの人々か三類の内なるらん。また誰人たれびとか法華經の行者なりとさゝれたるらん。をぼつかなし。彼の三類さんるいの怨敵おんてきに我等入りてやあるらん。また法華經の行者の内にてやあるらん。をぼつかなし。周の第四昭王の御宇二十四年甲寅こういん四月八日の夜中やちゆうに、空そらに五色の光氣こうけ南北に亘わたて昼のごとし。大地六種に震動し、雨ふらずして江河井池の水まさり、一切の草木そうもくに花さき菓このみなりたりけり。不思議なりし事なり。昭王大おおいに驚き、大史蘇由たいしそゆう占うらなて云く、西方さいほうに聖人生れたり。昭王問て云く、この国いかん。答こたえて云く、事なし。一千年の後に彼聖言かのしやうごんこの国にわたて衆生を利すべし。彼のわづかの外典の一毫未断見思いちごうみだんけんじの者、しかれども一千年のことをしる。はたして仏教一千一十五年と申せし後漢の第二明帝の永平十年丁卯めいていの年、仏法漢土にわたる。これは似るべくもなき釈迦・多宝・十方分身の仏の御前みまえの諸菩薩の未来記なり。当世日本国に三類の法華經の敵人てきにんなかるべしや。されば仏付法蔵經等に記きして云く、我滅後に正法一千年が問あいだ、我正

法を弘むべき人、二十四人次第に相續すべし。迦葉、阿難等はさてをきぬ。一百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の竜樹菩薩等一分もたがわず、すでに出給いぬ。この事いかんがむなしかるべき。この事相違せば一經みな相違すべし。いわゆる舍利弗が未来の華光如来、迦葉の光明如来もみな妄説となるべし。爾前返て一定となつて永不成仏の諸声聞なり。犬・野干をば供養すとも阿難等をば供養すべからずとなん。いかんがせん／＼。第一の「有諸無智人」と云うは、經文の第二の「惡世中比丘」と、第三の納衣の比丘の大檀那等と見へたり。随て妙樂大師は「俗衆」等云云。東春に云く「公処に向かう」等云云。第二の法華經の怨敵は、經に云く「惡世中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるをこれ得たりと謂い、我慢の心充滿せん」等云云。涅槃經に云く「この時に、まさに諸の惡比丘あるべし。乃至、この諸の惡人、また、かくのごとき經典を讀誦すといえども、如来深密の要義を滅除せん」等云云。止觀に云く「もし信なきは、高く聖境に推して、己が智分にあらずとす。もし智なきは、増上慢を起し、己仏に均しと謂つ」等云

云。道綽どうしゃく禪師云く、「二に理深解微りじんげみなるに由る」等云云。法然云く、「諸行は機あらに非ず、時を失う」等云云。記の十に云く、「恐らくは人謬あやまり解げせん者、初心の功德おおいの大なることを識らずして、しかして功こうを上位うゑいに推り、この初心を蔑ないがしろにせん。故に今彼の行ぎょう浅く功深きことを示して、以て經力きやうりきを顕あわす」等云云。伝教大師云く、「正像やや稍過やすぎ已つて、未法みなほただ近ちかきにあり。法華一乗の機、今正ましくこれその時なり。何を以て知ることを得る。安樂行品に云く、末世まつせ法滅ほつめつの時なり」等云云。慧心えしんの云く、「日本一州えんき円機じゆんいつ純一なり」等云云。道綽どうしゃくと伝教でんけうと法然ほふぜんと慧心えしんといづれこれを信しんずべしや。彼は一切いっせつ經に証文しやうもんなし。これは正ましく法華經ほふわきやうによれり。その上、日本国一同にっぽんこくいつどうに叡山えいざんの大師だいしは受戒じゆかいの師しなり。なんぞ天魔てんまのつける法然ほふぜんに心をよせ、我が剃頭ていづの師しをなげすつるや。法然ほふぜん智者ちやうならばなんぞこの積せきをせん選択せんちやくに載おせて和會わえせざる。人の理りをかくせる者ものなり。第二の惡世あくせい中比丘ちゆうひしよと指さるゝは法然ほふぜん等の無戒むがい邪見じやけんの者ものなり。涅槃經ねはんきやうに云く、「我等われら悉しつく邪見じやけんの人と名なづく」等云云。妙樂めうがく云く、「自らみづか三教さんきやうを指さしてみな邪見じやけんと名なづく」等云云。止觀しくわんに云

く「大経だいぎょうに云く、これよりの前は我等みな邪見の人と名づくるなり。邪、あに悪にあら
ずや」等云云。弘決に云く「邪は即ちこれ悪なり。この故にまさに知るべし。ただ円を善
となす。また二意あり。一には順を以て善となし、背を以て悪となす、相待そうだいの意いひなり。著じやく
を以て悪となし、達たつを以て善となす。相待・絶待ぜつたいとも俱すべかに須すべからく悪を離るべし。円えんに著じやくする、
なお悪なり。いわんやまた余をや」等云云。

外道の善悪は小乗経に対すればみな悪道。小乗の善道乃至四味三教さんぎようは法華経に対すれば
みな邪悪。ただ法華のみ正善しよせんなり。爾前にんぜんの円えんは相待そうだい妙みよう、絶待ぜつだい妙みように対すればなお悪なり。前
三教に損すればなお悪道なり。爾前にんぜんのごとく彼の經の極理ごくりを行こずるなお悪道なり。いわん
や觀經等のなお華嚴・般若經等に及ばざる小法しよほうを本もととして法華経を觀經くわんぎやうに取入とりいれて、還かえつ
て念仏ねんぶつに対して閻拋えんぱう閉捨へいしやせるは、法然並に所化の弟子等・檀那等は誹謗正法の者にあらず
や。釈迦・多宝・十方の諸仏は「法をして久しく住せしめんが故にここに來至したまえ
り」。法然並に日本國の念仏者等は法華経は末法に念仏ねんぶつより前まへに滅尽めつじんすべしと。あに三聖さんしよじやう

の怨敵にあらずや。

第三は法華經に云く、「或は阿練若あれんにやにあり、納衣のうえにして空閑くうげんに在つて、乃至白衣びやくえの与ために法を説いて、世に恭敬くくつじせらるること、六通むくつうの羅漢らかんのごとくならん」等云云。六卷の般泥洹經に云く、「羅漢に似たる一闍提あつてあつて悪業あくごうを行じ、一闍提あつてに似たる阿羅漢あらかんあつて慈心じしんを作さん。羅漢に似たる一闍提あつてありとは、これ諸の衆生しゆじやうの方等を誹謗ひわうするなり。一闍提あつてに似たる阿羅漢あらかんとは、声聞しやうもんを毀きして広く方等を説き、衆生しゆじやうに語つて言いく、われ汝等なんだちと俱ともにこれ菩薩ぼさつなり。所以ゆゑは何んいか、一切いっけつ皆如来けつらいの性じやうあるが故ゆゑに。しかも彼の衆生しゆじやうは一闍提あつてと謂いわん」等云云。涅槃經ねはんけいに云く、「我れ涅槃ねはんの後、像法ざうぽうの中なかにおいて、まさに比丘びくうあるべし。持律ぢりつに似像にせうして少すくかに經典けいげんを讀誦どくじゆし、飲食おんじきを貪嗜とんしして、その身を長養ちやうようせん。袈裟けさを服ふくすといえども、なお獵師りやくしの細視さいし徐行じゆかうするがごとく、猫ねこの鼠ねずみを伺うかがうがごとし。常にこの言ことばを唱なえん、我れ羅漢らかんを得たりと。外ほかには賢善けんぜんを現あはわし内うちには貪嫉とんしつを懷いだく。瘡法あほうを受けたる婆羅門ばらもん等のごとし。實じつには沙門さもんにあらずして沙門さもんの像かたちを現げんじ、邪見熾盛じしじやうにして正法しやうぽうを誹謗ひわう

せん」等云云。妙楽云く、「第三最も甚し。後ごの者はうた転た識しりがたきを以ての故に」等云云。東春とうしゆんに云く、「第三に或有わくう阿練若あれんにやより下しもの三偈は即ちこれ出家の処に一切の悪人を撰す」等云云。

東春に「即ちこれ出家の処に一切の悪人を撰す」等とは、当世日本国にはいずれの処ぞや。

叡山か園城か東寺か南都か。建仁寺か寿福寺か建長寺か。よく／＼たづぬべし。延暦寺の

出家の頭かしらに甲冑かつちゆうをよろうをさすべきか。園城寺の五分法身の膚はだえに鎧杖がいじようを帯せるか。彼

等は經文のうえに納衣ない在空閑ざいくげんと指すにわにず。為世所恭敬いせしよくぎやうにやま如六通羅漢じゅうつうらんと人をもはず。またてんなん転難

識しき故こというべしや。華洛からくには聖しやう一等いつとう、鎌倉には良觀等らうくわんとうにいたり。人をあだむことなかれ。

眼まなこあらば經文のうえに我身わがみをあわせよ。

止觀の第一に云く「止觀の明静みやうじやうなる前代いままに未だ聞かず」等云云。弘くの一に云く「漢の明

帝夜夢みしより陳朝ちんてうに洎およぶまで 予あらかじめ禅門ぜんもんに廁まじわりて、衣鉢えはつ伝授する者」等云云。補注ふちゆう

に云く「衣鉢伝授とは達磨を指す」等云云。止しの五に云く「また一種ぜんにんの禅人、乃至もつは盲跛もうはの

師徒しと、一一俱ふたりともに墮落とらくす」等云云。止との七しちに云く「九くの意い、世間よんげの文字もんじの法師ほふしと共ともならず。また事相じそうの禪師ぜんしと共ともならず。一種いっしゆの禪師ぜんしは、ただ觀心くわんしんの一意いちいのみあり。或あるは浅あく、或あるは偽いつわる。余あの九くは全ぜんく無なし。これ虚言そごにあららず。後賢こうけん眼まなこあららん者ものは、まさまに証知しやうちすべきなり」。弘こうの七しちに云く「文字もんじの法師ほふしとは内うちに觀解くわんげなくしてただ法相ほふさうを構かう。事相じそうの禪師ぜんしとは、境智きやうちを閑ならわず鼻膈びかくに心こころを止とむ。乃至乃至、根本こんぽん有漏定うろじやう等らなり。一師いっしただ觀心くわんしんの一意いちいあり等らとは、これは且まらく与よて論ろんをななす。奪うばえば則すなはち觀解くわんげ俱ともに闕かく。世間よんげの禪人ぜんにん偏へんえに理觀りくわんを尚たうび、すすでに教きやうを諳そひんぜず。觀くわんを以もて經きやうを消しょうし、八邪はちじや八風はつぷうを数かずえて、丈六じちろくの仏ぶつとななし、五陰ごおん三毒さんどくを合がして、名なづけて八邪はちじやとななし、六入むくじゆを用もちて六通むくつうとななし、四大しだいを以もて四諦しだいとななす。かかくのことく經きやうを解げするは、偽いつわの中の偽いつわなり。何なにぞ浅あく論ろんずべけんや」等云云。止觀しくわんの七しちに云く「昔鄴せきやく洛らくの禪師ぜんし、名なは河海かかいに播しき、住ぢゆうするときは則すなはち四方雲しやううんのごごとくに仰あぎ、去さるときは則すなはち阡陌群せんぱくぐんを成なし、隱々いんいん轟々かうかう、また何なにの利益りやくかある。臨終りんしゆうに皆悔みなくゆ」等云云。弘こうの七しちに云く「鄴せきやく洛らくの禪師ぜんしとは、鄴せきやくは相州さうしゆうにあり。即すなはち齊魏せいゑいの都みやこするところな

り。大いに仏法を興す。禅祖ぜんその一はじめなり。その地を王化おうけす。時人じにんの意を護まもつてその名を出いださず。洛は即ち洛陽なり」等云云。六卷の般泥洹經に云く「究竟くきようの処ところを見ずとは、彼かの一闡提いつせんたいの輩ともがらの究竟あくじつの悪業あくごうを見ざるなり」等云云。妙樂云く「第三最も甚はなはだし、転うたた識しりがたきが故ゆえに」等。

無眼むげんの者・一眼いちげんの者・邪見じあの者は末法まっほの始はじめの三類さんるいを見るべからず。一分いちぶんの仏眼ぶつげんを得るもの、これをしるべし。「国王・大臣・婆羅門居士…に向かつて」等云云。東春とうしゆんに云く「公処こうじょに向かつて法ほを毀そしり、人を謗ぼうる」等云云。それ昔、像法ぞうぼうの末すえには護命ごみよつ・修円しゆえん等、奏状そうじやうをさへげて伝教大師でんけうだいしを讒奏ぜんそうす。今末法まっほの始はじめには良觀りやうくわん・念阿ねんあ等、偽書ゐしよを注しゆして將軍家しゆんげんにさへぐ。あに三類さんるいの怨敵おんてきにあらずや。

当世たうせいの念仏者ねんぶつしや等、天台法華宗たいたいほふくしゆの檀那だんなの国王こわう・大臣だいじん・婆羅門居士ばらもんこし等に向て云く、法華經ほふくきやうは理深りしん、我等われらは解微げみ、法ほは至いたつて深く、機き至いたつて浅あし等と申しうとむるは、「高推かうすい聖境せいけい非己ひこ智分ちぶん」の者ものにあらずや。禅宗ぜんしゆの云く、法華經ほふくきやうは月つきをさす指さし、禅宗ぜんしゆは月つきなり。月つきをえて指さしなにかせ

ん。禅は仏の心、法華経は仏の言なり。仏、法華経等の一切経をとかせ給いて後、最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく。そのしるしに仏の御袈裟を迦葉に付属し、乃至付法蔵の二十八、六祖までに伝う等云云。これらの大妄語、国中を誑酔せしめてとしひさし。

また天台・真言の高僧等、名はその家にえたれども我宗にくらし。貪欲は深く、公家武家ををそれてこの義を証伏し讚歎す。昔の多宝・分身の諸仏は法華経の「令法久住」を証明す。今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり。かるがゆへに日本国にただ法華経の名のみあつて得道の人一人もなし。誰をか法華経の行者とせん。寺塔を焼て流罪せらるゝ僧侶はかずをしらず。公家武家に諛うてにくまるゝ高僧これ多し。これらを法華経の行者というべきか。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すでに国中に充滿せり。金言のやぶるべきかのゆへに法華経の行者なし。いかんがせん／＼。そもそもたれやの人か衆俗に悪口罵詈せらるゝ。誰

の僧か刀杖を加へらるゝ。誰の僧をか法華經のゆへに公家武家に奏する。誰の僧か
 「さくさくけんひんずい数数見擯出」とたびたび度々ながさるゝ。日蓮より外に日本国にとりいだ取出さんとするに人なし。日蓮
 は法華經の行者にあらず、天これをすてたもつ給ゆへに。誰をか当世のとうせい法華經の行者としてぶつご仏語
 をじつご実語とせん。仏とだいば提婆とは身とかげ影のごとし。生々にはしうじうじなれず。聖徳太子と守屋とは
 蓮華の花けか葉同時なるがごとし。法華經の行者あらば必かならず三類の怨敵あるべし。三類はすで
 にあり。法華經の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし。一いちげん眼の龜のふぼく浮木にあ値うなるべし。
 ある人云く、当世の三類はほぼあるにいたり、ただし法華經の行者なし。汝をなんじ法華經の
 行者といはんとすればだい大なる相違あり。この經に云く「天のもろもろ諸の童子どうじ以てきゆうじ給使をなさ
 ん。刀杖も加えず、毒も害すること能わず」。また云く「もし人おめ惡罵すれば口則ち閉塞す」
 等。また云く「現世げんぜには安隱あんのおんにして後には善処ぜんじよに生れん」等云云。また「頭破かうへわれて七分
 と作ること阿梨樹ありじゆの枝のごとくならん」。また云く「また現世げんぜにおいてその福報を得ん」
 等。また云く「もしまたこのきんてん經典を受持する者を見て、その過惡かあくを出いださん。もしは實に

もあれ、もしは不実にもあれ、この人現世に百癩の病を得ん」等云云。答て云く、汝
 が疑い大に吉し。ついでに不審を晴さん。不輕品に云く「悪口罵詈」等。また云く「或
 は杖木瓦石を以てこれを打擲す」等云云。涅槃經に云く「もしは殺、もしは害」等云
 云。法華經に云く「しかもこの經は如来の現在すらなのお怨嫉多し」等云云。仏は小指を提婆
 にやぶられ、九横の大難に値い給う。これは法華經の行者にあらずや。不輕菩薩は一乘の
 行者といわれまじきか。目連は竹杖に殺さる。法華經記削の後なり。付法蔵の第十四の提
 婆菩薩・第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ。これらは法華經の行者にはあらざる
 か。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて江南にうつさる。北野の天神
 ・白居易、これらは法華經の行者ならざるか。
 事の心を案ずるに、前生に法華經誹謗の罪なきもの今生に法華經を行ず。これを世間
 の失によせ、或は罪なきを、あだすれば、忽に現罰あるか。修羅が帝釈をいる、金翅鳥
 の阿耨池に入る等、必返て一時に損するがごとし。天台云く「今我が疾苦は皆過去に

由る、今生の修福しゆふくは報 将来にあり」等云云。心地觀經しんじかんぎやうに云く「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」等云云。不輕品に云く「その罪畢おえおわつて」等云云。不輕菩薩は過去に法華經を謗ほうじ給ふ罪身にあるゆへに、瓦石がしやくをかほるとみへたり。また順次生じゆんじしやうに必かならず地獄ぢやくに墮おつべき者は重罪を造るとも現罰なし。一闡提これなり。

涅槃經に云く「迦葉菩薩、仏に白して云く、世尊、仏の所説のごとく大涅槃の光、一切衆生の毛孔もうくに入る」等云云。また云く「迦葉菩薩、仏に白して言もつさく、世尊、云何ぞいまだ菩提心おひを發さざる者、菩提の因を得ん」等云云。仏、この問とひを答こたえて云く「仏ほとけ、迦葉に告げたまわく、もしこの大涅槃經を聞くことありて、我われ菩提心おひを發することを用いずと言つて、正法を誹謗せん。この人即時に夜夢の中において羅刹らせつの像かたちを見て、心中怖畏ふいす。羅刹語つたなつて言もつく、咄つたなし善男子、汝今もし菩提心おひを發おこさずんば、まさに汝が命を断つべし。この人惶怖こうふし、寤さめおわつて即ち菩提の心を發す。まさに知るべし、この人はこれ大菩

薩なりと」等云云。いたう（甚）の大悪人ならざる者、正法を誹謗すれば即時に夢みてひ
 るがへる心生ず。また云く「枯木石山」等。また云く「焦種甘雨に遇うといえども」
 等。また云く「明珠淤泥」等。また云く「人の手に創あるに、毒藥を捉るがごとし」等。
 また云く「大雨空に住せず」等云云。これらの多くの譬あり。詮するところは上品の
 一闍提の人になりぬれば、順次生に必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰なし。例せば夏の
 桀・殷の紂の世には天変なし。重科ありて必ず世ほろぶべきゆへか。
 また守護神この国をすつるゆへに現罰なきか。謗法の世をば守護神すてゝ去り、諸天まほ
 るべからず。かるがゆへに正法を行はずるものにするしなし。還て大難に値べし。金光明
 經に云く「善業を修する者は日々に衰減す」等云云。悪国悪時これなり。具さには立正安
 国論にかんがへたるがごとし。
 詮するところは天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の
 行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識

に値ゆへなり。善に付け悪につけ法華經をすつる、地獄の業なるべし。本と願を立つ。日本国の位をゆづらむ、法華經をすて、觀經等について後生を(一期)せよ。父母の頸を刎、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用いじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。

疑て云く、いかにとして汝が流罪・死罪等、過去の宿習としらむ。答て云く、銅鏡は色形を顕わす。秦王駿偽の鏡は現在の罪を顕わす。仏法の鏡は過去の業因を現す。般泥洹經に云く、「善男子、過去に曾て無量の諸罪、種種の悪業を作る。この諸の罪報は或は輕易せられ、或は形状醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家・邪見の家に生まれ、或は王難に遭い、及び余の種種の人間の苦報あらん。現世に軽く受くるはこれ護法の功德力に由るが故なり」等云云。この經文、日蓮が身にあたかも符契のごとし。狐疑の氷とけぬ。千万の難も由なし。一一の句を我が身にあわせん。「或は輕易

せられ」等云云。法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云。二十余年が間の輕慢せらる。「或は形狀醜陋」。また云く「衣服足らず」。予が身なり。「飲食麤疎」。予が身なり。「財を求むるに利あらず」。予が身なり。「貧賤の家に生まれ」。予が身なり。「或は王難に遭い」等。この經文、人疑うべしや。法華經に云く「數々見擯出」。この經文に云く「種々」等云云。「これ護法の功德力に由るが故なり」等とは、摩訶止觀の第五に云く「散善微弱なるは動ぜしむること能わず。今止觀を修して健病虧けざれば生死の輪を動ず」等云云。また云く「三障四魔、紛然として競い起る」等云云。

我無始よりこのかた悪王と生れて、法華經の行者の衣食田畠等を奪とりせしことかざらず。当世日本國の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし。また法華經の行者の頸を刎こと、その数をしらず。これらの重罪はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。果すも余残いまだつきず。生死を離るる時は必この重罪をけしはて、出離すべし。功德は淺輕なり。これらの罪は深重なり。権經を行ぜしにはこの重罪いまだをこらず。鉄

を熱あつにいたう(甚)きたわざればきず隠かくれてみえず。度々たびたびせむればきずあらわる。麻子あまのみをしぼるにつよくせめざれば油あぶら少すくきがごとし。今いま日蓮強盛にっじんじやうせいに国土の謗法を責せむれば大難の来るは、過去の重罪じゆうざいの今生こんじやうの護法ごほふに招まねき出いだせるなるべし。鉄は火に値たわざれば黒し。火と合あいぬれば赤し。木をもつて急流きゅうりゆうをかけば波山なみのやまのごとし。睡ねむれる師子ししに手をつくれれば大おおに吼ほゆ。

涅槃經ねはんぎやうに云く「譬たとえば貧女びんによめのごとし。家に居こして救護きうごの者あることなく、加かうるにまた病びやう苦飢渴けがくに逼せめられて遊行ぎゆぎやう乞丐きがいす。他たの客舎かくしやに止とどまり、寄よりて一子いっしを生うず。この客舎かくしやの主ぬし、駈逐くちくして去さらしむ。その産うまひていまだ久ひさしからず、この兒こを携抱けいほうして他国たこくに至いたらんと欲ほし、その中路ちゆうじゆにおいて悪風雨あくふううに遇あつて寒苦さむ並ならび至いたり、多く蚊虻ぶんべい・蜂螫ほうしやく・毒虫どくちゆうの啖食たんじきつところとなる。恒河こつがに逕きやう由じゆし兒こを抱かかいてしかして度わたる。その水漂疾ひやくしやくなれどもしかも放はなち捨てず。ここにおいて母子ぼし遂つひに共俱ともに没もしぬ。かくのごとき女人にょにん、慈念じねんの功德こく徳によりて、命終みよつじゆうの後のち、梵天ぼんてんに生うまず。文殊師利もんじゆしり、もし善男子ぜんなんしあつて正法しやうほふを護まもらんと欲ほせば、彼の貧女びんによめの恒こつ

河にあつて、子を愛念するがために身命しんみょうを捨つるがごとくせよ。善男子、護法の菩薩もまたまさにかくのごとくなるべし。寧ろ身命を捨てよ。かくのごときの人は、解脱を求めずといえども解脱おのずか自ら至ること、彼の貧女の梵天ぼんてんを求めざれども梵天みずかに自ら至るがごとし」等云云。この經文は章安大師、三障をもつて釈し給へり。それをみるべし。

「貧人びんにん」とは法財ほふさいのなきなり。「女人にょにん」とは一分いちぶんの慈ある者なり。「客舎かくしや」とは穢土えどなり。

「一子いつし」とは法華經の信心しんじん了因りょういんの子なり。「舍主しやしゆく駟逐くちく」とは流罪りゅうざいせらる。「その産さんしてい

まだ久しからず」とはいまだ信じてひさしからず。「惡風あくふう」とは流罪りゅうざいの敕宣しやくせんなり。「蚊虻もんもつ」

等とは「有諸うしよむ無智むち人惡口にんあつく罵詈めり」等なり。「母子ぼし共没くもつ」とは終つひに法華經の信心しんじんをやぶらずし

て頭かぶを刎はらるゝなり。「梵天ぼんてん」とは仏界ぶつがいに生うまをいうなり。

引業いんごうと申すは仏界までかはらず。日本・漢土の万国の諸人を殺すとも五逆・謗法なければ無間地獄むくわんじごくには墮おちず。余の惡道たさいにして多歲たさいをふ(經)べし。色天しきに生うまること、万戒まんがいを持たもてども万善ばんぜんを修しゆすれども、散善さんぜんにては生うまれず。また梵天王ぼんてんおうとなる事、有漏うろうの引業いんごうの上に慈

悲を加えて生しよつずべし。今この貧女びんによが子を念おもうゆへに梵天うまに生る。常つねの性相しよせうには相違さういせり。章安じやうあんの二はあれども、詮せんするところは子を念おもう慈念じねんより外の事ことなし。念ねんを一境いじきやうにする、定じやうに似にたり。専せんら子を思しう、また慈悲じひにもにたり。かるがゆへに他事たじなければども天てんに生るか。

また仏ほとけになる道みちは華嚴けわげんの唯心ゆいしん法界ほふかい、三論さんろんの八不はつふ、法相ほふさうの唯識ゆいしき、真言まごんの五輪觀ごりんくわん等らも実じつには叶かなうべしともみへず。ただ天台たいがいの一念いっぺん三千さんぜんこそ仏ほとけになるべき道みちとみゆれ。この一念いっぺん三千さんぜんも我等われら一分いちぶんの慧解えげもなし。しかれども一代いちだい経々きやうきやうの中にはこの経きやうばかり一念いっぺん三千さんぜんの玉たまをいだけり。余あま経きやうの理りは玉たまににたる黄石わうせきなり。沙すなをしぼるに油あぶらなし。石女せきによに子のなきがごとし。諸しよ経きやうは智者ちしやなお仏ほとけにならず。この経きやうは愚人いふじんも仏因ほとけいんを種くわべし。「解脱げつだつを求めざるに、解脱げつだつ自おのずから至いたる」等らと云いふ。

我われ並びに我弟子わがし諸難しよなんありとも疑ぎう心こころなくわ自然じねんに仏界ほとけがいにいたるべし。天てんの加護かごなき事を疑ぎはされ。現世げんぜの安穩あんゑんならざる事をなげかされ。我弟子わがしに朝夕ちやうせき教きやうえしかども疑ぎいををこし

てみなすてけん。つたなき者のならひは約束せし事をまことの時はわするゝなるべし。妻子を不便ふびんとをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫たじきうくわつにしたしみし妻子には、心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつ（何時）も同じわかれなるべし。我法華經の信心をやぶらずして、靈山りやうせんにまいりて返かえりてみちびけかし。

疑て云く、念仏者と禅宗等を無間と申すは諍あらしう心あり。修羅道にや墮つべかるらむ。また法華經の安樂行品に云く「樂ねがて人及び經典の過とがを説かざれ。また諸余の法師を輕慢きやうまんせざれ」等云云。汝この經文に相違するゆへに天にすてられたるか。

答て云く、止觀に云く「夫それ仏に兩説あり。一には撰しやう・二には折しやく。安樂行に不稱長短と云く、止觀に云く「夫れ仏に兩説あり。一には撰・二には折。安樂行に不稱長短」といふごとき、これ撰の義。大經に刀杖を執持しゆつじし、乃至首を斬れといふはこれ折の義。与よ・奪途だつみちを殊ことにすといえども、俱に利益せしむ」等云云。弘決に云く「夫れ仏に兩説あり等とは、大經に刀杖を執持すとは、第三に云く、正法を護る者は五戒を受けず、威儀いぎを修しゆせず。乃至下の文に仙予國王等の文あり。また新しん醫禁いじて云く、もし更になすことあれば、

まさにその首を断つべし。かくのごとき等の文、並びにこれ破法の人を折伏するなり。

一切の経論この二を出でず」等云云。

もんく
文句に云く「問う、大経は国王に親付し、弓を持し箭を帯し、悪人を催伏せよと明す。この経は豪勢を遠離し、謙下慈善せよと剛柔碩に乖けり。いかなぞ異らざらん。答う、大経は偏えに折伏を論ずれども、一子地に住す。いかなぞ曾て摺受なからん。この経は偏えに摺受を明せども、頭破七分という。折伏なきにあらず。各一端を挙げて、時に適うのみ」等云云。涅槃經の疏に云く「出家・在家、法を護らんには、その元心の所為を取り、事を棄て理を存して、匡に大経を弘めよ。故に護持正法と言う。小節に拘らざれ。故に不修威儀と言うなり。昔の時は平にして法弘まる。まさに戒を持すべし、杖を持つことなかれ。今の時は嶮にして法翳る。まさに杖を持すべし。戒を持つことなかれ。今昔俱に嶮なれば、まさに俱に杖を持すべし。今昔俱に平なれば、まさに俱に戒を持すべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等云云。汝が不審をば世間の学者多分道理

とをもつ。いかに諫曉かんぎょうすれども日蓮が弟子等らもこのをもひすてず。一闡提人のごとくなるゆへに、先まず天台・妙楽等の釈をいだしてかれが邪難をふせぐ。

夫れ摂受とくじう・折伏せふくと申す法門は水火のごとし。火は水をいとつ。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。無智悪人の国土に充満の時は摂受とくじうを前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす。常不輕品のごとし。譬へば熱あつき時に寒水を用い、寒き時に火をこのむがごとし。草木そふもくは日輪の眷屬、寒月かんげつに苦をう、諸水は月輪がつりんの所従、熱ねつじ時に本性ほんしやうを失う。末法に摂受・折伏あるべし。いわゆる悪国あくこく・破法の兩國あるべきゆへなり。日本国の当世とうせいは悪国か破法の国かとしるべし。

問とて云く、摂受の時折伏を行ずると、折伏の時摂受を行ずると、利益りやくあるべしや。答こたえて云く、涅槃經に云く「迦葉菩薩あまに白もつして言もつさく、如来の法身ほつしんは金剛こんごう不壞ふえなり。

しかもいまだ所因を知ること能わず、いかん。仏の言のたまわく、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、この金剛こんごう身を成就じゆじゆすることを得たり。迦葉、我護持われこじ正法の因縁にて、

今この金剛身常住不壞を成就することを得たり。善男子、正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず、まさに刀劍弓箭を持すべし。かくのごとく種々に法を説くも、しかも故師子吼を作すこと能わず。非法の悪人を降伏すること能わず。かくのごとき比丘は自利し及び衆生を利すること能わず。まさに知るべし、この輩は懈怠懶惰なり。能く戒を持ちて、淨行を守護すといえども、まさに知るべし、この人は能くならずとるなからん。乃至、時に破戒の者あつて、この語を聞き已つて、咸共に瞋恚して、この法師を害せん。この説法の者、たとひまた命終すとも、故持戒自利他と名づく」等云云。章安の云く、「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等。天台云く、「時に適うのみ」等云云。譬えば秋の終に種子を下し田畠をかえ（耕）さんに稻米をうるることかたし。

建仁年中に法然・大日の二人出来して念仏宗・禅宗を興行す。法然云く、法華経は末法に入ては「未有一人得者・千中無一」等云云。大日云く、「教外別伝」等云云。この両義国土に充滿せり。

天台・真言の学者等、念仏・禅の檀那をへつらい、をそるゝ事、犬の主しゆにををふり、ねづ
 みの猫ををそるゝがごとし。国王・將軍にみやつかひ、破は仏法の因縁・破国の因縁を能く
 説き能くかたるなり。天台・真言の学者等、今生こんじゆには餓鬼道に墮ち、後生ごじゆには阿鼻あびを招
 くべし。たとい山林にまじわつて一念三千の觀をこらすとも、空閑くうげんにして三密の油をこぼ
 さずとも、時機をしらず、摂折しやくせつの二門を弁わへずば、いかでか生死しじゆを離るべき。
 問とて云く、念仏者・禅宗等を責めて彼等にあだまれたる、いかなる利益りやくがあるや。
 答こたえて云く、涅槃經に云く、「もし善比丘、法を壊やぶる者を見て、置いて呵責かしゃくし、拳処こしよ
 せずんば、まさに知るべし、この人は仏法ぶつぽうの中の怨あだなり。もし能く駈遣かぢんし、拳処
 せば、これ我が弟子、真の声聞ねはんじよなり」等云。涅槃疏ねはんじよに云く、「仏法を壊乱えらんするは仏法の中
 の怨あだなり。慈あだなくして詐いつわり親かしむはこれ彼が怨あだなり。能く糾治きゆうじせん者はこれ護法の声
 聞、真の我が弟子なり。彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親しんなり。能く呵責あする者は
 これ我が弟子なり。駈遣あせざらん者は、仏法の中の怨あだなり」等云。

夫れ法華經の宝塔品を拜見するに、釈迦・多宝・十方分身の諸仏の來集はなに心ぞ、「法をして久しく住せしめんが故にここに來至したまえり」等云云。三仏の未來に法華經を弘めて、未來の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中をすいするに、父母の一子の大苦に値うを見るよりも強盛にこそみへたるを、法然いたわしとおもはで、末法には法華經の門を堅く閉て人を入れじとせき、狂兒をたばらかして宝をすつるやうに法華經を抛させける心こそ、無慚に見へ候へ。我父母を人の殺すに父母につげざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すをせいせざるべしや。惡人寺塔に火を放んに、せいせざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とをみてせいせざる者はかくのごとし。「慈なくして詐り親しむはこれ彼が怨なり」等云云。日蓮は日本国の諸人にしたしき(親)父母なり。一切の天台宗の人は彼等が大怨敵なり。「彼がために惡を除くは即ちこれ彼が親なり」等云云。

無道心の者、生死をはなるゝ事はなきなり。教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給い、天台大師の南北並びに得一に「三寸の舌もて五尺の身をたつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄いまだ唐都を見ず」等といわれさせ給し、みな法華經のゆへなればはぢならず。愚人にほめられたるは第一のはぢなり。日蓮が御勘気をかほれば天台・真言の法師等悦ばしくやをもうらん。かつはむざんなり、かつはきくわい（奇怪）なり。夫れ釈尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那に入る。提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云く「時に適うのみ」等云云。仏法は時によるべし。日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には大樂をつくべければ大に悦ばし。